
竜脈隔世

小鳥遊奈鳥。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜脈隔世

【Nコード】

N6844V

【作者名】

小鳥遊奈鳥。

【あらすじ】

※この小説は“龍のアザを左胸に宿す少年”の改稿です。

お知らせ

9／24

はじまりのうたのビューネ大陸の地図を修正しました。
前回よりも地名などの固有名詞が減っていますが、小説内の進行に合わせてその都度修正していきます。

龍のアザを左胸に宿す少年の方は修正してないので、前回のが見た
い場合はそちらへ

9／23

第二章に突入しました。

オステン王国の王家の血筋を引く者は歳が三になる頃、体のどこ
かに何か生き物を象った痣のようなモノが現れることがある。

それは、蝶や鳥などの小さく、か弱き生物や獅子や虎などといっ
た強く大きな生物であったり、また……存在自体がほぼ幻である様
な竜であったりする。

その痣は《王認紋》と呼ばれ、主人公のヴィントも左胸に《王認
紋》を宿す。しかし、彼にはある問題が、その問題を解決するため
旅にでる。旅立ちの日、森の中で一人の少女に出逢い、そして二人
はお互いに惹かれ合う。

はじまりのうた

窓辺から入る月明かりを背に一人の女性がある本のページをめくる。

「太古の昔、神様は世界を……大地を、空を、海を、山を、森を、川を、風を、生命を、そして人間をこの世に創りました。」

「神様は人間を慈しみ、愛し、いろいろなモノを授けました。」

「住むところや良い暮らしをする為に必要な道具や知識、技術を……」

「人々は神様に感謝し、毎日を精一杯に生きていました。」

「人々は日々の生活を一生懸命に生きた結果、世界はいつのまにかたくさんの人間で埋め尽くされ、たくさんの村や町、国が出来てきました。」

「同じ人間同士、仲良くしようと隣の村や町、国の間でたくさんの交流が始まりました。」

「最初の頃は自分の住んでいるところと違う文化や暮らしに興味や関心を持っているだけでしたが、いつしか人々はこう思うようになりました。」

「——隣の奴らは同じ人間なのにどうしてあんなに良い暮らしをしているんだ？」

——隣の統治者はあんなに寛容なのにここの圧政は酷すぎるのだろうか？

「人々は日々の生活をもっと良く送る為にと村や町、国同士で……また、同じ村や町、国の中でも争いが生まれました。」

「人々は自分たちの小さな世界だけでなく、外の大きな世界を識^しることで妬みや僻みといった負の感情を持ち始めました。」

「負の感情を持ったことにより争いに生まれ、人々はたくさん悲しみや苦しみ、憎しみ恨みなどの負の連鎖が生まれてしまいました。」

「すると、今まで魔界で暮らしていた魔王や魔物達が人間の負の感情におびき寄せられ、人間の世界へと姿を現すようになりました。」

「人間は自分たちと違う異形の姿をした魔物達に恐怖を抱き、人間同士で争うことをやめて魔王と魔物達に立ち向かうことにしました。」

「人々は力を合わせて魔王や魔物達と戦いましたが、彼らの強靱な爪や牙、肉体に歯が立ちません。」

「それを見ていた神様は魔王や魔物達に対抗できるよう、人間に“魔法”を授けました。」

「魔法を得た人間達は長い……永い戦いの末、多大な犠牲を払いながらも魔王や魔物達を撃退することができました。」

「けれど、人間達が一度持った負の感情は無くなることはなく、魔

物達は今も人間の世界へやってきては人々を襲い、人々は心も体もボロボロになってしまいました。」

「それを見兼ねた神様は《空の女神》に人間の世界で人々の心の拠り所になるように言いました。」

「《空の女神》は人々の心を勇気付け、一緒に魔物達と戦いました。それから……あら？　もう寝ちゃったみたいね。」

母親は読んでいた本をベッド横の机に置き、机に置いてある灯り点す魔法具を止めると室内は窓から差す月明かりに優しく包み込まれる。

母親は椅子から立上がりふかふかのベッドに気持ち良く寝ている少年に顔を寄せる。

そして、少年の顔にかかる金色の髪を優しく払い、母親は微笑を浮かべながら頬に唇を落とすと部屋から静かに行く。

「おやすみ、ヴィオ。」

ボタン

母親が慈愛に満ちた声で息子……ヴィントにおやすみの挨拶をして部屋を出て行くと、室内は静寂に満ちた。

スヤスヤと眠るヴィントの安らかな寝顔をただ月明かりが照らし続ける。

十　十　十

創世から幾星霜……

世界には豊かな自然とそれらに囲まれた人々の穏やかな生活、どこかで生まれる憎しみと悲しみに満ちた争いや人間と魔物の戦い……相反するモノがありふれた世界。

美しくも穢れた……そんな矛盾した世界のある大陸。

その名はビューネ大陸。

東西南北と中央の五つに分かれた国から成る。

海と大地に恵まれ、人々の活気に溢れたオステン王国はビューネ大陸の東に位置する。

この国の王家には歳が三になる頃、体のどこかに何か生き物を象った痣のようなモノが現れることがある。

それは、蝶や鳥などの小さく、か弱き生物や獅子や虎などといった強く大きな生物であったり、また……存在自体がほぼ幻である様な竜であったりする。

その痣は《王認紋》と呼ばれ、初代国王であるアインス王に宿り、現在は王家の象徴と守り神であるとされ、脈々と紡がれた血の中に秘められた竜の意志がその発現を決めるとされ、生まれ持った人物

の潜在的な素質により生物の格の高さが決まる。

また、《王認紋》には魂が宿り、魂には独自の魔力源が存在していて、その魔力量は一般的な魔術師の数倍から数十倍と莫大な魔力量を誇る。

しかし、その《王認紋》の恩恵を得るには心身共に成熟していなければならず、未熟なまま操ろうとすると逆に莫大な魔力によって身を滅ぼされてしまう。

その為、母親は自分の子どもが三歳になる日、段々と浮かび上がる《王認紋》の周りに封印を施し、心身が成熟するまで魔力が暴走しない様にする。

そして、心身共に成熟すると母親は封印を解き、父親が《王認紋》の魔力と子どもの魔力に合わせる《調律》と呼ばれる儀式を行う。

《調律》をする事で《王認紋》に宿る魂の恩恵を得る事ができる様になり、また、《王認紋》が模している生物を世界に顕現させることができるようになり、王になる資格が認められるのであった。

はじまりのうた（後書き）

改めてに方も新しい方もこの『竜脈隔世』りゅうみやくかくせいをよろしくお願いします。

感想等頂けたら執筆スピードが上がる機能を搭載しました。（え

誤字脱字の報告もお待ちしております。

第一章：第一話：隔てられる空と風（前書き）

感想、誤字脱字の報告お待ちしております。

第一章：第一話：隔てられる空と風

「本当に一人で行くの？ 何ならゼクレをお供に付ける？」

城の裏の通用口で装飾の少なめな一見質素にも見える薄い黄色のドレスを身に纏った美しい女性が、頬に手を当てて心配そうな表情を浮かべている。

陽の光を浴びて黄金に輝く髪を風に遊ばせるその女性はまるで絵画のようで、見るもの全てを虜にする。

貴族たちの豪華絢爛な社交界にでも出れば貴族達から様々な賛辞の言葉やダンスの誘いなど引く手数多だろうが、その可能性は限りなく零に近いだろう。

何故なら――

「いや、いいよ。ゼクレは母さん付きのボディーガードだしさ。」

――すでに一児の母であるからだ。しかも、その息子、歳は十七歳である。

そして、今代の王家の恥と呼ばれる様な数々の衝撃的事件を起こした張本人である。

「私にボディーガードなんていると思う？」

見目麗しい見た目からは想像できないアグレッシブな性格の女性……オステン王国の現国王の第二子のシエロは、ふふんと腰に手を当てて豊かな胸を張るといふ幼い行動を取る。

誰が見ても二十代半ば……時には二十代前半や十代の少女にも見間違えられるこの女性、自分が産んだ目の前の息子の年齢にはすでに身籠っている。

年齢は推して計るべきである。

「いい歳してそんなポーズ取るなよ、母さん。」

いまだに歳を感じさせない母親に、息子は傍らにいる馬の顔を撫でながら皮肉を言う。

軽口を叩き合う二人の傍らには、燕尾服を身に纏い蒼銀の髪を結い上げた若い女性が、整った顔に表情一つ浮かべず佇んでいるが、親しい者から見れば頭を痛そうにしているのが窺える。

普段は立場など気にしなくて良いと目の前の主人達は言っているが、今日は曲がりなりにもオステン王国王家の人間の旅の門出であり、立场上なんとか頭に手をやるのを我慢しているのも窺い知れる。

燕尾服を着こなす若い女性、ゼクレはエメラルドグリーンの瞳を閉じ、目の前の母子がしている当分は聞けないだろう言葉の応酬に耳を傾ける。

オステン王国の恥と言われている母から生まれた問題児であるが、王位継承権第三位のヴィントの生い立ち上、派手な式は開かれず、極少数の身内だけに挨拶を済まし、静かに出発しようとしている。

しかし、追い討ちを掛けるように嫌味たらしくヴィントの出発を見下ろしている複数の視線を感じたゼクレは人知れず心の中でため息を吐いた。

声は聞こえないだろうが、これは曲がりなりにもヴィントという王族の旅の門出という式典だ。

自分が式典中に変な動作や粗相でもしようものなら、これ幸いとすぐにでも元老院派の大臣達が自分の代わりに、彼らにとって都合のいい人間をシエロ付きの使用人に宛がうに違いない。

そうになったら、シエロは様々な陰謀が渦巻く王宮でほぼ孤立無縁になる。

そう考える優秀な使用人の苦悩など露知らずといった感じで目の前の母子は気楽そうにしている。

「まア、それは置いといて……俺は大丈夫だ。それに母さんの方こそ何があるか分からないだろ？ しかも、ゼクレがいないと母さん……何もできないだろ。」

「うぐっ、失礼ね……」

「朝は起きられないし、服の在り方もゼクレがいないと分からないだろ。いいよ、一人で大丈夫だ。」

「……色々と癪に障ることを言われてるのは気に入らないけど……まァいいわ、気をつけて行きなさい、ヴィオ。」

「ああ、行ってくる。母さんのことよろしく頼むな、ゼクレ。」

「この命に代えてもお守りします。ヴィント様もお気をつけて。」

恭しく頭を下げるゼクレにヴィントは苦笑交じりの顔を見せる。

「おいおい、今更俺らの間にそんな畏まった言葉は要らないだろ。」

「しかし、どこで誰が見聞きしているか分かりませんし・・・」

実はこの二人、幼少期から一緒に育ってきた幼馴染である。

シエロ付きであった前使用人の娘であるゼクレは、親同士が仲が良かったのもあり、ヴィントとは姉弟の様に育ってきた。

「ああ、糞ジジイ共（元老院）の視線のことか。それなら大丈夫だろ。耄碌した目じゃ大して見えてないさ。盗聴系の魔法を使われている気配も感じないしな。行動にだけ気をつければいいさ。」

ヴィントは万人を魅了する様な紅の瞳を一瞬、王城に向けながら嘲笑う様に言う。

「驚いたわ……ちゃんと気づいていたの？ しかも、そこまで気が付い……ッ!？」

ヴィントの発言に感心するのも束の間。

「「ッ!？」」

王城の方から直径2メートルはあろう火炎球が三人に迫って来る

のをその場にいた全員が察知する。

「出て行くって言ってんのに最後までしつこいな。」

「これ、ヴィオにじゃなくて私狙いじゃない？ あわよくば三人諸共とかでしようけど。」

火炎球が迫っているにも関わらず暢気に相手側の意図について話し合う母子。

そんな二人を尻目にゼクレは一步前が出る。

もしも、二人が迎撃でもしようものなら大臣達の糾弾を受けるのは目に見えてる。

お前は何の為にシエロ様に付いているのだ？ と……失敗しても同じだ。

「ふう……お二人は下がって下さい。バイン・シュタルク脚部強化……ハッ！」

——まあ、こんなカスみたいな魔法なんて屁でもないけど！

迫り来る火炎球をゼクレはジャンプし、天高く蹴り上げる。

「「たーまやー」」

そして、二人の投げやりな言葉に着地を失敗しそうになる。

気を取り直してゼクレが二人と向き合おうとすると、火炎球の飛んできた方向から一人の兵士が小走りでやってくる。

兵士が近づくにつれ、その兵士がオステン軍の魔術師団の部隊長の証であるローブを着ていることに三人は気付く。

「これはこれは……シエロ様にヴィント様。お二人が先ほど我が部隊の魔術演習で誤ってこちらに放たれた火炎球を天高く弾き飛ばされたのですか？」

部隊長は王族相手に粗相をしたにも関わらずに大した焦りも見せずにいる。

「いいえ、私の付き人であるゼクレが対応してくれたわ。」

シエロも相手の態度など齒牙にも掛けずに穏やかに答える。

「そうでしたか……いや、我が部隊の者が手元を狂わしてしまいまして誠に申し訳ありませんでした。危うく王族の方に怪我を負わせてしまうところでした。」

「なッ……!？」

「ゼクレ。」

そんなシエロに対して誠意が全く感じられない部隊長の言葉にゼクレが声を張り上げそうになるのをヴィントが止める。

「おやおや、一体どうなされましたか、シエロ様？」

「……ラディカーレン大臣。」

王城から歩いてくる人物にヴィントが忌々しそうに名前を呟く。

「その者、私に詳しく話さない。」

「ハッ、実は……」

部隊長はラディカーレンに事の顛末を伝えた。

まるで申し合わせて合ったような二人の会話は出来損ないの茶番劇より酷く、それを冷たく見る二つの視線と感情が読めない視線が一つ……

その視線に気付かないラディカーレンは後に、自分の策略が目の前の人物に全く持って無意味だったことを思い知ることになる。

第一章：第二話：死の羽音

部隊長の報告を頷きながら聞いていたラディカーレンが口を開く。

「なるほど、そのような恐れ多き事が……しかし、実際には被害も特に出ていないのですね。いやいや、シエロ様やこれから旅立つヴィント様の御身体に怪我がなくて安心しました。」

「……」

ラディカーレンはいかにも仰々しい口上を述べるが表情の端には邪魔者を始末出来なかった悔しさが滲み出ている。

「ですが、この件を見逃す訳にもいきませんね……シエロ様、この者の処罰は私に任せて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ええ、ラディカーレン大臣に任せますわ。」

「では、私はこれで……行くぞ。」

「ハッ！」

「あ、ラディカーレン大臣。」

部隊長を引き連れて王城に戻ろうとするラディカーレンをシエロが呼び止める。

「何でしょうか、シエロ様？」

「そのあなたは先にお城の入り口で待ってなさい。」

「ハッ！」

シエロが部隊長を下げさせるとラディカーレンの表情が硬くなる。

「さて……あなたって確か元老院に入ってからまだ年数が浅いのでしたっけ？」

「はあ、そうですが……それがなにか？」

シエロの質問の意図が分からずにラディカーレンは訝しげな表情を見せる。

「やっぱりね……ラディカーレン大臣は私の《王認紋》が何を模しているかご存知で？」

「？ 確か、蜂ではありませんでしたか？」

「ええ、間違いではありません。」

「「ッ……」」

ラディカーレンの答えに微笑をもって応えるシエロにヴィントとゼクレは寒気を覚えた。

「ちなみに私の《王認紋》である蜂……女王蜂^{ヴェスベ}の能力はご存知ですか？」

決してこの国の女王にはなれないだろう自分の《王認紋》^{ヴェ}が女王蜂^{スベ}とはどんな皮肉か……シエロは心の中で自嘲する。

「……いえ。」

「それはそうでしょうね……なんたって元老院内でも極秘事項のこの能力を下っ端のあなたが知るわけないわよね。」

先ほどの少女を思わせるような微笑は鳴りを潜め、目の前の人間を嘲笑うそれ変わった。

（（うわ、久しぶりの裏だ……））

ヴィントとゼクレは顔を俯かせながら嵐が過ぎ去るのをただ待つ。

「なっ……」

「《王認紋》の格という括りからみれば、確かに私の女王蜂^{ヴェスベ}は高くはないわ、むしろ低いほうね……でも、ならどうして私は今まで元老院にも始末されずに生きてこられたか分かるかしら？」

「……」

「答えは単純よ。私のコトを恐れてるからよ……この女王蜂^{ヴェスベ}の毒をね。」

左手で首筋の《王認紋》を撫で、^{コメン}「おいで、女王蜂^{ヴェスベ}」というシエロの呼びかけと共に、体長3cm程の漆黒の蜂が《王認紋》から現れた。

「フンッ……そ、それなら知っているぞ。極秘事項というからどんなものかと思えば……お、お前の能力は蜂の針に仕込まれた麻痺毒だろう？ 現王家の中で唯一の虫ケラを《王認紋》に持つ落ちこぼれが、ひい！？」

シエロの見下すかのような態度に、ラディカーレンは今まで保っていた体裁のある態度を消し、怯えながらも憤りの言葉を上げる。

しかし、シエロが顔の横でホバリングしていた女王蜂ヴェスベをラディカーレンにけしかけると短い悲鳴と上げて腰を抜かす。

「30点ね、その毒も持っているわ。でもね、他に猛毒もあるのよ……ラディカーレン大臣。」

女王蜂ヴェスベの羽音が耳元で響き、ラディカーレンは恐怖で顔を歪ませる。

「まだいくつかえげつない能力もあるのだけれど……それは企業秘密。……金輪際、私たちにちょっかいを出さないと誓うなら今回のポイント稼ぎの暗殺計画も私に対する暴言も見逃してあげるわ。だから、今すぐ消えて。」

「は、はひい……」

ラディカーレンは何度も転倒を繰り返しながら城へと逃げ帰っていった。

+

+

「さて、仕切り直しますか……」

「そうだな……」

無事に嵐が過ぎ去り、げっそりした二人が嘆息する。

「ヴィオもゼクレもどうしたの？ ほら、しっかり！ せっかくの晴れの日なんだからさ！」

（（原因がよくもまあ……））

この二人、小さい頃はシエロに魔術や体術を習い、毎日ボロ雑巾になるまで絞られていた為、シエロの高圧的な裏の態度が出てくると精神磨耗を引き起こすまでになった。

現王家で最低格の《王認紋》を持ちながら（王族同士で戦うことはないのだから）おそらくは最強にして最凶の強さを持つシエロ。

単身で時間は掛かろうとも、国を滅ぼすことが不可能ではない彼女の怒りに触れたラディカーレンは憐れとしか言いようがない。

……自業自得ではあるが。

「……はあ、俺がいないからってゼクレに迷惑掛けるなよ、母さん。

」

「なっ、そんなことするわけないでしょ！」

「そうであることを願います。」

「ゼクレまで……もう二人とも知らないッ！」

頬を膨らませて腕を組み、そっぽを向くという歳を感じさせない目の前の母親の仕草に、ヴィントとゼクレは顔を見合わせて苦笑する。

ヴィントは馬を手綱で引き寄せて背に跨ると、腕を伸ばして母親の頭を撫でる。

「拗ねるなって、母さん。」

「……うん。」

こうしていると母子にでなく、まるで兄妹だな……とゼクレはぼんやり考える。

「ゼクレ。」

「ん？」

自分の名前を呼ぶ声に反応すると、ヴィントが拳を向けていた。

「誰かが見てるんじゃないの？」

修練中によくやった拳と拳を合わせて“お互い頑張ろう”の意味を含めた自分たちのポーズだということに気付いたゼクレは、懐かしさと気恥ずかしさから軽口を叩く。

「流石にさっきのアレを見たら怖気歸ったみたいだ。元老院も当分は静かにしているだろうよ。」

そんなゼクレの気持ちをなんとなく察しながら、ヴィントは苦笑して答える。

「そう……なら安心ね。」

コッソ

二人は不敵な笑みを浮かべながら拳を軽く合わせた。

懐かしい二人のポーズをシエロは微笑を浮かべて見つめる。

「さて、それじゃ行って来るよ。二人とも身体に気をつけてな。それとゼクレ、小父さんと小母さんによろしく言っといてくれ。」

挨拶を済ましたヴィントは手綱を操り、母親と幼馴染のもとを後にする。

「「いってらっしゃい、ヴィオ。」」

ここに、ヴィントの父親探しの旅が幕を上げた。

第一章：第三話：隔世された意思

大陸暦1348年

オステン王国の王城を後にしたヴィントは手綱を操り、ビューネ大陸の中央に位置するシェントウルム共和国へと、できるだけ人目に付かないように大きな街道や町は避けながら向かう。

格好も王族が着る煌びやかな服装ではなく、町に住む少年が着るような服装である。

午前中一杯を急ぎ足で駆けたので、現在は国境付近にある森の入り口へと差し掛かった。

ヴィントは手綱を引き寄せて馬を止め、今まで駆け抜けてきた道を振り返る。

とっくの昔に王城は見えなくなっているが、自分の国を目に焼き付けようとして……

国を出ることはもちろん初めてではなく、王家の人間として他国での式典に参加することも過去に何度かあったが、こういった形で国を出るということに感慨を覚えるヴィントだった。

+

+

+

ヴィントの生まれ育ったオステン王国は、海と大地に恵まれ、人々の活気に溢れた国で、そこを統治する代々の国王の善政により、国民による王家への信頼も厚い。

特に現国王のケーニヒ王は獅子の《王認紋》を持ち、政治に軍事と極めて卓越していることもあり、国民からは尊敬を込めて、他国からは畏怖を込めて獅子王レーヴェと呼ばれている。

しかし、そんな獅子王ケーニヒレーヴェも寄る年波には勝てず、さらにここ数年は病に伏せており、医者からも先は長くないと宣告されている。

そのことで現在、オステン王国では後継者問題が起きている。

ケーニヒ王には、ヴィントの母親であるシエロとその姉であるマールマールの二人がおり、王位を継ぐためには王家の証である《王認紋》の発現が絶対の条件である。

現王家は竜の意志に氣に入られているらしく、国王と次期後継者の二人だけしか発現しないというのが多い歴史の中で《王認紋》の発現が多く、長子のマールには狐の《王認紋》、次女であるシエロには蜂の《王認紋》が現れており、その子ども達も発現している。

生物の格に多少は左右されても、基本的には長子や国王に一番近

い血縁の者が王位継承するので問題は起こらないはずだった。

問題になっているのはマールとその入り婿であるシュトラントが十五年前に事故に遭いこの世を去ってしまっていることである。

次女のシエロは過去に起こしたある事件によって王位継承権を放棄させられている。

そんな中でケーニヒには《王認紋》が発現している孫が三人いる。

それがマールの息子であるザルツとヴァッサーとシエロの息子であるヴィントである。

それぞれケーニヒとの血縁の近さは同じであり、《王認紋》も発現している。

ここで問題になっているのが《王認紋》の格とその顕現についてである。

王家では《王認紋》が模している生物を世界に顕現させることができるようになり、王になる資格が認められる。

その為には心身が成熟した頃に母親による封印の解除と父親による《調律》の儀式が必要であるのだが、三人ともその儀式を行う前に親がいなくなっている。

しかし、ここでネックなのが儀式前に母親が死ぬとその瞬間に封印は解除され、《調律》も竜の意志が然る時が来れば行ってくれるということだ。

両親の出番は無さそうに思えるが、リスクもそれなりに高い。

まず、母親が死去した時に子どものキャパシティーが足りなければ魔力の暴走が起こり、最悪死に至ることもある。

父親の手による《調律》でなく、竜の意志による《調律》は荒く、こちら最悪ショック死などを起こすことも過去に数例あり、それらは竜の試練などと呼ばれている。

だが、ザルツとヴァッサーは竜の試練をマールとシュトラントが亡くなったその晩に軽く乗り越え、王や元老院を驚愕させ……喜ばせた。

こんなに素質のある兄妹は歴代の中でも群を抜いてる、と……その時二人は8歳と6歳であった。

だが、ヴィントに《王認紋》が発現して、二人の評価も国民の期待も元老院の思惑も全てがひっくり返った。

何故ならヴィントに発現した《王認紋》は初代国王であるアインス王と同じであり、過去に一度しか発現しなかった竜だったからである。

国民は、フオーアヘルシャフト覇王竜アインスの再来と歓喜した。

そこに意義を唱えたのが元老院である。

元老院としては、《王認紋》の格云々は置いといて、何よりも血統を第一に考えたのだ。

現国王である獅子王^{レーヴェ}ケーニヒの長子であるマールと王家の中で最も優秀なシュトラントの子どもであるザルツとヴァッサーの二人に対して、第二子であるシエロの息子であるだけで気に食わないのだ。

そしてなにより、ヴィントの父親の素性が分からず、現在は方不明になっていることである。

そこにシエロの王位継承権の剥奪と母子二代に渡る元老院との確執が始まったのだが……

+

+

+

幼少期のシエロは活発な子供であり、年齢が八になる頃にはマールもシュトラントと結婚して子供を身ごもっていたので、シエロは“自分は王位継承しない”と子供心に考え、歳を重ねるごとに周囲からお転婆娘と評されるようになっていった。

大陸暦1330年

シエロがもう十七になる頃、相も変わらず城下へと従者も連れずに繰り出していた時に彼女は不思議な雰囲気を持つ同年代の少年と出会い、そして恋をした。

少年は遠くの地からの旅人で数ヶ月の王都での滞在時にシエロと

出会い、瞬く間に愛し合うようになった。

二人は様々な事を語り合い、王都内を巡り、時には国内の名所へ足を運びながら仲睦まじく過ごした。

そんな二人が体を重ね合うのに長い時間は掛からなかった。

だが、彼……ヴォルケはとある目的の為の旅路であり、どうしてもオステン王国へと腰を落ち着かせることはできなかった。

ヴォルケが別れを惜しむように王都を旅立ってから数ヶ月後、シエロは妊娠に気づき、周囲からの大反対を押し切って子どもを産んだ。

その子どもがヴィントだったのである。

第一章：第四話：白昼に響く悲鳴

そうしていたのが数十秒か数分かは分からないが、我に返ったヴィントは国境を越えてシェントウルム共和国へと向かうために手綱を握る。

太陽は真上まで昇ってきたが木々や葉に生い茂った森の中の道には木漏れ日が漏れる。

ヴィントは木陰で昼食と馬の休憩を取り、寝転がって大陸の地図を広げる。

「ハア……しかし、本当に親父なんか見つけれんのか？ うゝん……」

——手がかりは名前と髪と瞳の色だけ……名前はヴォルケ。銀髪で蒼眼紅眼と……容姿はかなり特徴的だから大陸中を虱潰しに探すしかないな。

「死んでないのは確かだろうけど……」

ボソツと呟いて瞼を閉じる。

+

+

《王認紋》を持ち《調律》を終えていない子どもの父親が死んでいる場合は最低15、6歳には竜の意志の働きかけがあるものだがヴィントにはそれがまだ来ない。

という事は、父親がまだ生きている証明になる。

よって、竜の意志による《調律》は期待できず、父親の手による《調律》をしなければ、いくら霸王竜^{フォーアヘルシャフト}アインスの再来と呼ばれても竜を世界に顕現させることができず、王になる資格が認められない。

そのことでヴィントは父親がすでに死んでいることを期待していたがその期待は裏切られ、元老院を喜ばせた。

元老院としては決してヴィントに王位は継承させたくなく、《王認紋》の顕現ができればどんなに素質があるうが国民からの支持があるうと、王位継承の大前提が成立しないからだ。

邪魔者であるヴィントは幼少期から今に至るまで元老院からの暗殺の危機に晒され、ヴィントの封印の解除を終えた時からはシエロも暗殺の危機に晒されるようになった。

封印を解除する前にシエロが死ねばヴィントの封印は確実に解除され、父親が死んでいればザルツとヴァッサーの例のようにヴィントも正式な王位継承者となり、国民の支持の高さからヴィントの次期国王への声を止めきれないと元老院は考えていたが、それも杞憂に終わったからだ。

このままケーニヒ王が亡くなれば王位はマールの第二子であるザルツが継ぐだろう。

ザルツ自身はシエロには興味を持っていないがヴィントには劣等感を持っている。

性格は気高いので暗殺などをたくらむことは無いが、元老院のたぐらみからヴィント達を擁護することもないだろう。

そうなれば、二人の生きる道はほぼ閉ざされることになる。

二人の能力がずば抜けて高くても、ゼクレなどの一部の協力的な^{なかま}使用人がいるとしても、権力を持った敵意のある人間の悪意というモノは防ぎきれない。

生き辛い世界を変えるためにヴィントは父親を探しに行くことにした。

+

+

+

木漏れ日から漏れる太陽の光を瞼の裏に感じ、ヴィントの意識が落ちようとした時……

「きやあああー」

森の奥の方から静寂を劈く悲鳴が聞こえ、沈みかけていた意識が浮上する。

——若い女性の悲鳴……何かあったのか？

「聞こえたからには無視はできない、か……せめて最悪の事態にはなっしてくれてるなよ。」

ヴィントは怠慢な動きで頭をボリボリと掻きながら起き上がり、目を見開く。

紅の双眸が猛禽類を思わせる鋭いそれに変わり、森の奥を見つめると傍らにいる馬には跨らずに駆け出した。

一步、二歩と足を踏み出すとその速度は馬が走る速度と遜色なくなつた。

さらに木の幹や枝を器用に伝い、森の中を駆け抜けていく姿はまるで忍者のようだ。

駆け出して数分に満たないぐらいの頃、ヴィントの視界に数人の男と一人の少女の姿が映りこんだ。

遠目から見たところ、少女に怪我や着衣の乱れはなさそうなのを確認したヴィントは、手ごろな木の枝に立ち止まり、瞼を閉じると深呼吸して呼吸を整える。

しかし、次に目を開けた時にヴィントの目に映りこんだのは、少

女が地面にへたり込んでいて、三人の男が少女に迫ろうとしている瞬間だった。

——クソッ！ 何で気を抜いた、俺。修練中にこんなところを母さんやゼクレが見ていたら拳か魔術が飛んでくるぞ！

思考は一瞬。

ヴィントは数十メートルあった距離を一瞬で詰めたかと思うと、四人が知覚する前に先手を打つ。

エルガン・ドナー
「怒りの雷」

ドッシャー——ン

稲光と共にけたたましい轟音が森に響き渡る。

ヴィントが膨大な魔力に物を言わせて使った魔術は、本来なら雷の精霊に呼びかけるための詠唱を飛ばし、魔術名を唱えるだけで世界に魔術を発動させる無詠唱だった。

無詠唱は普通に詠唱した時よりも倍から数倍近い魔力を消費し、発動も不安定になりやすい部分があるが、速効性に優れた高等技術であり、基本的には遠距離戦や前衛をつけて詠唱時間を稼ぐ戦闘を常識とする魔術師が、接近戦での高速戦闘にも一人でも対応できるようにしたものだ。

そんな中で、ヴィントの発動した魔術は一般的な“怒りの雷”となんら遜色が無いどころか威力も規模もそれを大きく上回っている。

ヴィントの“怒りの雷”の発動を知覚した時にはすでに手遅れ。

火や水などの属性を持つ魔術の中でも最速の雷に二人が地面に沈んだ。

ただ一人だけが“怒りの雷”の効果範囲から逃げられたようだ。

「よく避けることができたな。完全に不意を突いたと思ったんだが……」

「ゼエゼエ……何なんだ、テメーはよッ!？」

突然木の上から現れたヴィントに声を荒げる赤毛の男。

「悪党に名乗るほど俺の名前は安くはないんでね。お前も沈め。」

ヴィントは男に一瞬で迫ると、鳩尾に拳を叩き込む。

「うがっ……」

ドサツと音を立てて倒れこんだ男に一瞥をくれると、先ほどから静かな少女に目を向ける。

すると、少女は座ったまま気絶していた。

どうやら“怒りの雷”の稲光と轟音に驚いたようだ。

ヴィントは少女の元へ歩み寄り、少女を横に寝かせる。

どうやら、気絶から睡眠へとシフトしたようで、スヤスヤと寝息

を立てている。

「まア無事のように何より……ん？」

今までは少女と男たちしか見えていなかったがよくよく周りを見回すと気絶している四人以外に、明らかな野盗といった風貌の男たちが十数人倒れていた。

「……あれ？」

改めて先ほどの三人を見直すヴィント。

こちらは野盗とは違う服装。

「もしかして、少女を襲う三人組じゃなくて、野盗に襲われる少女を助けに入った三人組だったりして……」

その場に立ち尽くすヴィントだった。

第一章：第五話：義を持つものたち

「ふっふっふっん♪」

木漏れ日が漏れる森の中で暢気に鼻歌を歌いながら一人の少女が歩いている。

銀色の綺麗な髪を背中まで伸ばし、瞳にはアメシストのような美しい紫の色合いを輝かせている。

彼女の背中には大きめの麻袋が一つ。

どうやら、どこかへの旅路の途中のようだ。

まだ出発したばかりなのか疲労感などは窺えず、とても気持ち良さそうに歩いていると少女の目の前に茂みからウサギが飛び出してきた。

ウサギは少女の前を横切ると、森の奥へ逃げていった。

「わ、かわいーく待ってよー」

可愛いものに目が無いのか、道から逸れるのも厭わずに、少女はウサギを追いかけて森の奥へと走っていった。

しかし、ウサギの軽やかな動きについて行けず、程なく見失った。

「あれえーいないなあ？ どこ行っちゃったのかな？」

そう呟きながら目の上に手を翳して辺りを見渡していると、後ろの茂みから物音がした。

「ん、ウサギかな？」

少女が期待に満ちた顔で振り向くとそこには、下卑た笑いを浮かべた十数人の男たちが少女を取り囲むようにして佇んでいた。

「へへ、物音がするから見に来てみりゃ、女がいんじゃないか！」

「ああ、しかもかなりの上玉じゃねーか！ 最近女を抱いてなかったし丁度良い。」

「そうだな、俺らで楽しんだ後は奴隷商人か娼婦館にでも売り飛ばすか……きつといい金になるぜ？」

男たちは少女の体を舐め回すように見つめながら口々に下賤な言葉を投稿かけると、懷からナイフを取り出す。

「ひっ！？」

少女は逃げようと後退りしようとするが、背後にあった木が退路を無くした。

男たちは剣や弓などの武器を片手に少女を囲んだ。

「無駄な抵抗すんなよ。何も殺したりしねーさ、ただ逃げたり暴れたりしたら痛い目に合うかもしれねーけどな。」

「ああ……けど、傷でもつけたら商品価値が下がるから気をつけろよ。」

「どうせならこの状況を受け入れちまえよ。どっちかという気持ちよくなれるぜ？　へへ……」

数人の男が近寄ってくるにつれて、少女は瞳にどんどん涙を浮かべていく。

だが、男達はそんなことも気にせず距離を縮めてきて、ついに少女は恐怖から悲鳴を上げた。

「イツ、イヤ！　だっ、誰か助けて…キャア」

少女の悲鳴が白昼の森に響き渡る。

「へっ、そんなに声出しても誰も助けに来ねーよ。」

「ああ、こんな森の奥まで人なんか来ないさ。」

「しかし、五月蠅いのもなんだ、猿ぐつわでもしておくか。」

男達の手が少女に触れようとしたとき

「オイ、お前ら！　その嬢ちゃんに何をしている。」

近づいていた数人は声が聞こえてきた方に顔を向けると、目に映ったのは視界一面の靴底だった。

「へぶっ!?!」

闖入者たちに蹴り飛ばされた三人は奇声を発して、少女から少し離れていた盗賊たちの元へ吹っ飛んできた。

「何だ、貴様らは？」

盗賊の中でも周囲の連中とは漂う雰囲気が違う男……盗賊の頭は闖入者たちに鋭い視線と共に疑問を投げかける。

少女も突然の展開に思考が追いつかないようで、口が開いている。

「何だっていいだろ。俺らはお前等の敵……ただそれだけだ。」

赤毛の男は不敵に笑うと腰に差してあった剣を引き抜く。

「ゲルプは左を、ブラウは右を頼んだ！」

赤毛の男が指示を出すと左右の二人が、おう！ と応える。

そんな三人を見て、盗賊の頭が口元を歪める。

「ゲルプにブラウ……フンっ、聞いたことがあるぞ……ということ
は貴様は箒星コメイトのルートか……」

「あ、聞いたことある……悪質な貴族や商人しか狙わないっていう
義賊……アンペル！」

頭の言葉に一人の男が続く。

「俺らも有名になっちまったな。」

「お前が派手なことばかりするからだ、ゲルプ。」

「うわ!？ それはねーべ、ブラウ。」

「おい、その辺にしておけ。さっさとこいつらを沈めるぞ。」

ロートの言葉に二人の雰囲気が変わった。

「いくぞ!」

「返り討ちにしろ!」

ここに義賊と盗賊の戦いが始まった。

+

+

+

三対十一という人数差をものともせず、あっという間に盗賊を片付けたアンペルの三人。

特にリーダーであるロートの強さは圧倒的で、一人で盗賊の頭を含めて五人も倒したのだ。

扱う剣技は目で追えず剣の軌跡が彗星の様に目に映り、立ちほだかる敵をはるで塵やゴミを掃く様で、悪しき貴族や大商人には凶事

を運ぶ……いつしか^{コメント}箒星の二つ名が付くまでになった。

この世界で二つ名が付くという事は各国の騎士団の部隊長やその上を束ねる団長に、とオフアーが来るほどだ。

三人の戦いぶりに啞然としていた少女へ、剣を鞘へ収めたロートは体を向ける。

「嬢ちゃん、怪我は無いか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「そりゃ、よかった。立てるかい、嬢ちゃん？」

ロートに言われて何とか立ち上がる少女。

「はい……あっ!？」

しかし、今までであった出来事が衝撃的だったのか十秒もせず、再びその場にへたり込む少女。

「大丈夫か!？」

へたり込む少女に駆け寄ろうとする三人に不幸が起こった。

遠くから風に乗って魔術の発動が完了する魔術名……“怒りの雷”のオトが聴こえた。

「ッ!？」

ドッシャーーン

稲光と共にけたたましい轟音が森に響き渡る。

少女は突然の展開に意識を失い、ゲルプとブラウは雷に打たれて意識を刈り取られた。

何とか効果範囲から飛び出すように逃げたロートはすぐさま体勢を立て直し、“怒りの雷”の飛んできた方向を閃光で霞む目で睨み付ける。

「よく避けることができたな。完全に不意を突いたと思ったんだが……」

「ゼエゼエ……何なんだ、テメーはよッ!？」

突然木の上から現れた金髪紅眼の少年に声を荒げるロート。

「悪党に名乗るほど俺の名前は安くはないんでね。お前も沈め。」

ロートが瞼を閉じたのは一瞬……少年を次に見たときは鳩尾に拳を叩き込んでくる姿だった。

「うがっ……」

ロートはそこで意識を無くした。

第一章：第六話：その名は……

「……ん……ふぁ……」

ヴィントの膝の上で寝ていた少女はゆっくりと目を開け、焦点の合わないアメシストの瞳でヴィントを見る。

ちなみに盗賊たちはヴィントが一か所に集めて魔術で拘束されており、まだ目は覚ましていない。

アンペルの三人は拘束はされてはいないが、武装を解除して地面に転がっている。

「!? ……起きたか?」

トロンとした様子にヴィントは一瞬ドキッとする。

「はい……あなたは?」

目をパチパチと瞬きさせ、なんとか覚醒し始めたであろう頭は先ほど起きたことよりも目の前の現状把握に努めたようだ。

「俺はヴィン……ヴィオ。通りすがりの者だ。」

危うく本名を告げそうになったヴィントは咄嗟に偽名など思いつかず、誤魔化すように微笑を浮かべて愛称を告げる。

「君の名前は?」

「……っ!？」

怖がらせないように笑顔を浮かべるヴィントの顔を、ようやく覚醒した少女は至近距離で見つめて赤面すると、バツと起き上がり、あたふたしながらも自己紹介を始める。

「あ、わっ私の名前はアプリル。アプリル・フリーリングって言いましゅっ。」

盛大に囁んだ少女……アプリルは赤面していた顔をさらに赤くし、さながら瞬間湯沸し器のように顔から湯気が出る一步手前といったところだ。

「……ア、アプリルか……」

「は、はい……」

消え入るような声で返事をするアプリルだった。

「うう……」

そんなやり取りをしている二人から少し離れたところに転がっていたロートがどうやら目を覚まそうとしているようだ。

「あ、あの人は……」

「そうだ、何があったか教えてくれないか？」

ロートの呻き声に初めて辺りを見回すアプリルに状況の説明を求

めるヴィント。

大体の推測はついているが、流石に詳細までは掴めていない。

「えっと……」

アプリル自身も現在の状況が全く掴めていないが、最初の出来事から話し始めた。

所々噛みながら……

+

+

+

アプリルは自分が気絶したところまで話す。

「……」

「どうしました？」

何とも言えない顔でいるヴィントの様子を伺うアプリル。

「いや……ちょっと、な。」

「？」

要領を得ない回答にアプ Ril が困惑していると、突然ヴィントが目を鋭くさせた。

「ッ!？」

シュッと何かが空気を切る音がしたかと思うと、目の前にいたヴィントの姿は消え、その位置にナイフが飛んできた。

「キャッ!？」

「お目覚めのようで……^{コメイト}箒星のロートさん？」

声はアプ Ril の後ろから……いつの間にかヴィントは剣を抜き、投擲用のナイフを構えるロートと睨み合っていた。

「お陰様で最悪の目覚めだよ……で、お前は何者だ？」

「ただの通りすがりだ。」

「ハッ、ただの通りすがりがあんな魔術をぶっ放せるか……答えろ、……お前は何者だ？」

——流石は二つ名持ち……正体までは見抜けなくても大体のあたりはつけてるってか……そして、大分お怒りのようだ。

この国で魔術を扱える人間というのはそう珍しくはない。

だが、人を気絶させられるほどの威力を持つ魔術を扱える人間はそう多くはないだろう。

そんな人間はオステン王国の魔術師団か魔術師を輩出してきた名門貴族、そこそ腕のある冒険者ぐらいだ。

各国を股にかける義賊の目から見ればヴィントはどれにも当てはまらない。

魔術師団ならば一人で軍服も着ずにこんな森の中にいるのもおかしい、貴族ならば服装が質素すぎるくせに護衛の一人もない、一番当てはまりそうな冒険者にしては服装が軽装過ぎる上に漂う雰囲気明らかに違っている。

現在のヴィントは冒険者と同じカテゴリに近いが、その割には装備が少ない。

これにはある理由があるのだが、そこまではロートも見抜けないし、あながち的外れな見解でもない。

「悪いが、その問いには答えられないな。それから、先ほどの早とちりした攻撃は謝るから武器を下げてくれないか？」

「そんな提案を受け入れると思うか？」

剣を収めて両手を軽く上げるヴィントをロートが睨み付ける。

「ああ。」

ヴィントの提案を訝しげにしていたロートだが、ヴィントのあまりにも迷いのない返答に呆気を取られる。

「何故そう思う？」

「この娘を盗賊から守っただろ？ それにアンペルの噂は聞いているよ。悪しきを挫いて弱きを助けるってな。」

その言葉にロートは大声を上げて笑う。

「くくくッ……お前面白いな。」

「褒め言葉として受け取っておくよ。」

「いいだろう、お前の攻撃は許してやるよ。ただしそれには条件がある。」

「条件……？」

「ああ、俺と戦え。」

「……へ？」

今度はロートの提案を訝しげにしていたヴィントが呆氣に取られる番だった。

「こっちにも矜持^{プライド}ってのがあってな……不意打ちとはいえ、お前みたいなガキに手も足も出ずに負けたってのは納得いかねーんだよ。それに、随分と強そうだな。」

「……」

「それと……そうだな、俺が勝ったらお前の正体と強さの秘密を教

えてもらおうかね。逆にお前が勝ったら……適当になんか考えておけ。どうだ？」

「子ども相手に天下のアンペルが……って思うけど、落ち度はこっちにある。受けて立ってやろうじゃんか。」

「なら決まりだ。それから俺の剣を返せ。」

ヴィントは振り返り、木の後ろに隠していた剣を手にとるとロートに投げ渡す。

「アプリルは下がってってな。」

「ヴィオさん……」

剣を抜きロートと相対するヴィント。

「んじゃま、始めますか。」

「ああ。」

アプリルが見守る中、二人の姿がブレた。

ガキイーン

金属と金属がぶつかった音が森に響く。

十

+

+

何度音が森に響いただろう。

互いの力が拮抗しているのだろうか、どちらかが押し切るような展開にはまだなっていない。

「本気は出さないのか？」

剣の応酬を一旦止めてヴィントは訊ねる。

ヴィント自身も魔術を一切使っていないが、ロート自身も本気を出しているようには見えない。

「それはお互い様だろ？　だが、様子見もこれくらいにしとこうか。」

ロートは剣を水平に構えると人差し指と中指を立てて刀身の部分を撫でていくと、刀身に魔術文字が浮かび上がった。

「法剣か……」

法剣とは法具と呼ばれる武器の一つであり、魔術を使えない者の為に造られた剣である。

刀身の部分には魔術文字が刻まれており、その文字を撫でるだけで魔術文字に込められていた魔術が解放されるというものだ。

「いくぞ！ 箒星コメートの二つ名の真の意味を見せてやる！」

ロートは淡く発光する剣で襲い掛かってくる。

ヴィントは法剣の能力を恐れ、切り結ぶのではなくロートの頭上を飛び越え背後に回り込んだ。

そこで、違和感を覚える。

空気がおかしい。

フリーセン
「流れる。」

「!？」

瞬間、ロートの振るった法剣の軌跡が爆ぜた。

ヴィントは魔力を瞬時に高め、抵抗レジストする。

ロートも加減はしていたのか、体に火傷を負うことはなかったが、上に着ていた服が燃えた。

「!？ 左胸のそいつは……なんでこんな所に？」

所々で布地も残っているが上半身がほぼ半裸のヴィントの左胸には、初代国王……覇王竜フォーアヘルシャフトアインスの再来と呼ばしめた竜の《王認紋》があった。

「ちっ……」

「つてことはお前、ヴィント・シュタート・ナトゥーアか！」

ロートの驚愕の声が森に響いた。

木の下でアプ Ril も目を丸くしているのが視界に入った。

ヴィントは忌々しそう燃え残った服を引きちぎる。

「……そうだ。なあ、さっき俺が勝ったら適当になんか考えておけ
つて言ったな？」

「? ……ああ。」

「なら一つ言うことを聞いてもらおう、かッ！」

「勝てたら、なッ！」

二人の影が交錯した。

第一章：第六話：その名は……（後書き）

前回から間が空いてしまつて申し訳ないです（／＼；）

すでに大分改稿前とかけ離れてますね。

いや、そんなの最初からか……

大筋は変えるつもりは無いので、次話かその次ぐらいには第一章が
終わる予定です。一応。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております（^^）

第一章：第七話：幕は閉じられ（前書き）

まずはじめに葉瑠衣様。

感想ありがとうございます。

誤字脱字の報告、感想随時受付中です！

第一章：第七話：幕は閉じられ

先ほどの法剣の能力を警戒し、慎重になるヴィントに容赦なく剣戟が迫る。

「くっ……」

「破ッ！」

ロートの横薙ぎの一閃を紙一重で回避したヴィントは、剣を斜めに切り上げようとして再び違和感に襲われた。

反射的に行動を無理やり停止させ、バックステップすると目の前の空間が燃えた。

「ほう……二回目でもう対応し始めるか……」

「はぁ、はぁ……なんとなくその剣の能力が読めたぜ……その剣はガス操ってんだろ？」

そのまま距離を取ったヴィントに追撃の手を緩めて感心するロート。

追撃してこないロートあら視線は逸らさずに肩を落として深呼吸したヴィントは、淡く発光する剣の能力への推測を述べた。

「……ご明察。この剣……メテオアはお前の推測通り、ガスを操る。正確にはこの剣の通った空間の気体を可燃性のガスに変える訳

だが……よく判ったな。」

「最初に違和感を覚えたのは空気の感じがおかしいって思ったことだ。二回目でなんとなく判って後は半分鎌かけだ。」

「成程、まんまと俺は引っかけられた訳か。それにしても、お前本当に王家のボンボンか？」

「は？」

「いや、俺も初代アインス王の再来って呼ばれてのは噂で聞いてたけど、それだけなんだよな。ザルツとヴァッサー兄弟みたいに何かしらの戦歴を聞いた訳でもないし。」

「……」

「まアそれも含めて教えてもらおうとするか、な！」

「!？」

「^{グラーパーベン}穿て！　メテオア！」

瞬間、大魔術一撃分の魔力がメテオアに込められた気配を感じ、ヴィントは咄嗟に回避行動を取った。

直後、柄から分離した刃は超高速で放たれ、さらに軌跡をガスに変えて燃やすメテオアはジェット機さながらで、僅か十五の距離をゼロへと変える。

彗星の様なソレは瞬間的に音速の壁を突き破り、約340 m/s

の煌めく奔流は、僅か0.044秒という時間でヴィントの元にまで到達した。

発動の瞬間に危険を察知し、なんとかモーションを読むことができたヴィントはギリギリで煌めく暴風を回避できたが、発生したソニックブームに肌を数箇所刻まれた。

後ろを振り返れば直線上に並んでいた木が吹き飛んでいた。

「オイ、今の直撃してたら死ぬぞ……」

「……いや、悪イな。いつもと違って解放状態なのを忘れてたわ。」

最初の頃のギスギスしたやり取りからいつの間にか、どこか不穏な雰囲気はなくなっており、気心知れた者同士の会話の様になっている二人だった。

キュルキュル……

「ん？」

変な音が気になり、辺りを見回すとロートの手に握られたメテオニアの柄から銀色の糸が垂れていた。

だんだんと糸がピンと張ってきたところでその音が止まった。

「やっべ……どっかで引っかかってやがる。」

そう言うのと刃が飛んで行った方向へ駆け出して行った。

「あ、あの、大丈夫でしゅか？」

「っ……あ、ああ。致命傷ではないから大丈夫だ。」

本日何度目か判らないアプリルの噛み癖に一瞬笑い出しそうになるヴィントと、色々と頑張って話しかけた結果噛んだアプリルが悶える。

「そろそろ幕引きだな。」

ヴィントはそう呟くと魔力を高めた。

+

+

+

刃を回収してきたロートの目に、新たな服を着ていたヴィントが入った。

「ん？ 着替えたのか？」

すでにヴィントと戦うことが楽しくて当初の目的が大分薄れ、今は普段なかなか巡り会えない好敵手との全てのやり取りを満喫しているロート。

だが、ヴィントは――

「ロート。楽しんでるところ悪いが、そろそろ閉幕だ。」

――そう言って高めていた魔力を解放した。

「!？」

目に見えるほどの魔力の奔流に驚愕したロートだが、彼をさらに驚愕させる出来事が起きた。

ロートを中心に直径五メートル程の魔法陣が一瞬で現れた。

「ッ!？ 刻印魔術まで使えんのかよ!？」

刻印魔術とは地面や物体、宙空に果ては魂にまで魔術を刻み印すことが可能な上級技術である。

ちなみにロートの持つ法剣メテオアの刀身に刻まれた魔術文字も刻印魔術の一種である。

その中でも割かしポピュラーなのが、魔力を地面に刻み込む魔法陣である。

だが、それでも直径一メートルの魔法陣に役十分掛かるのが一般的であり、五メートルにも及ぶ魔法陣となると一時間は掛かるだろう。

少しでも魔力の配分や魔術文字の配置を間違えると魔法陣が暴走するため慎重に刻印しなければならないからである。

そんな時間の掛かる魔法陣だが、発揮される威力は戦略級なのに
対し魔力消費は詠唱魔術よりも少なく、ある程度の時間なら発動も
待機できるなどの理由で、主に戦争や籠城戦などの時に使われる。

そんな戦略級の刻印魔術をロートが戻ってくる僅かな時間に刻み
込んだヴィントの底はまだ見えない。

「勝負は勝負だからな。ちゃんと後で言うこと聞けよ。」

ロートが魔法陣の範囲から出ようとする魔法陣の外縁に沿った
見えない障壁に阻まれた。

パチン

ヴィントの合図と共に淡く光っていた魔法陣が一層輝いた。

グテーゼ・ペーベン
「轟音激震」

瞬間、ロートの世界が極大の音と揺れで満ちた。

本来の使われ方では外縁に沿った障壁など張られず、予め敵が通
るであろう進軍コースに仕掛けられ、効果範囲は一キロ四方に渡る
モノを全て内側に向けてあるのだから効果は計り知れない。

しかし、戦略に組み込まれる殺傷能力の高い“ブリッツ・ペーベン 轟雷激震”と違っ
てヴィントが考えたと言ってもいい亜種版の“グテーゼ・ペーベン 轟音激震”を使っ
ている分、加減はしてあるようだが、まず間違はなく轟音で三半規管
をやられて平衡感覚を無くし、あまりの激震に地割れが起き、岩が
突き出す大地に為す術もなく弄もてあそばれる仕様だ。

短くも長い時間でロートは息も絶え絶えになっていた。

「ぜえぜえ……グッ……」

ヴィントは満身創痍のロートの元へ赴くと、剣を首筋に当てた。

「できたら魔術は使いたくなかったんだが、そうも言ってもらえなくてね。ちよつとえげつない戦法を取らせてももらたけど、そこはまアお互い様ってことで……だから、今回は俺の勝ちだ。」

「ちっ……仕方、ねえな。今回、は、負けを……認め、てやる、よ。」

言質を得たヴィントは剣を鞘に納める。

「ああ、んじゃ一つ言うことを聞いてもらおうとするかな。」

「約束、だから……仕方ねーな。」

嫌々しそうなヴィントは笑顔でのたまった。

「ロート、お前……王宮で俺の母親の護衛を務めろ。」

「はぁー……?」

義賊稼業、強制休業。

第一章：第七話：幕は閉じられ（後書き）

突発的に楽屋ネタ的なものをしてみたんですが、あんまり納得できず、かといって消すのもなんだかなーと思ったので、活動報告に載せておきます。

なので見たい方はどうぞ。

今回はアプリルとの会話です。

毎回アプリルか他のキャラかも分からないし、毎回やるかも分からないグダグダスタートですが、よろしく願いします。

第一章：第八話：それぞれの理由（前書き）

まずはじめにbibliomania様。

誤字のご指摘ありがとうございました。

引き続き、誤字脱字の報告、感想受付中です！

第一章：第八話：それぞれの理由

とりあえず息も絶え絶えになっていったロートを治癒魔術で回復させるヴィント。

「ん、これで治ったと思うが具合はどうだ？」

横ではアプ Ril も心配そうにしている。

彼女にとってはロートたちが命の恩人なのだから。

「ああ、問題無し。それにしても治癒魔術まで使えるとは……随分とオールマイティだな、お前。」

「まア、な……さて、改めて言うが、ロートには俺の母親……シエロの護衛をしてもらいたい。」

「……確かに言うことを聞くとは言ったが、そういう長いスパンの命令じゃなくて、もっとすぐ済ませられるような命令はないのか？」

「無い。」

「サイデスカ。」

「……くす。」

二人のやり取りを面白そうに見ているアプ Ril だった。

「俺の母さんは王宮で今、孤立無援状態なんだよ。今までも暗殺な

んか後を絶えなかったんだが、俺と二分だった矛先が全部母さんに向かうとなるとちょい心配だな。」

「……お前、マザコンか？」

「マザコンと言うほどのもんじゃないが、俺を大切に育ててくれた人だ。心配するのは可笑しいことじゃないだろ？」

「そりゃ分らないが……ならお前が守ってやればいいじゃないか。」

どこか複雑そうな顔をするロートを気にしながらも言葉が続ける
ヴィント。

「それができないからお前に頼んでるんだよ。」

ヴィントはロートに父親探しの旅に出ることになった経緯を大まかに話す。

「……あれ？ あの、質問いいですか？」

おずおずといった感じのアプリルが律儀に手を挙げる。

「ん？ どうぞ、お嬢さん。」

「えっと、ヴィント様の父親でシエロ様の旦那様ってフェルシュング様じゃありませんでしたか？ どんな方かは知らないですけど……」

「ああ……それね。それは、違うんだ。フェルシュングってのは、

名前だけの架空の……元々この世にいない人間だ。」

それから俺のことはヴィオって呼んでくれ、ついでに様もいらないし敬語も要らないから、とヴィントは言った。

「あ、判りました……じゃなくて、どういう事ですか？ どうしてそんな国民を騙すようなことを……？」

「ああ、実は―――」

結局、敬語が抜けていないアプリルに苦笑しながら、ヴィントはシエロから何度も聞かされた二人の出会いを簡潔に話す。

「―――で、そんな不祥事が国民に知られたら王家の信用が落ちてしまっって心配した元老院がフェルシュングって架空の人物が出来上がり、そいつが俺の父親ってことになってるのさ。」

そして、元老院との確執も説明する。

「ということで、俺は今朝旅だったわけさ。……勝負に勝ったのに俺のことダダ漏れだな。」

ロートが出してきた条件に結局応えていることに気付いたヴィントは苦笑する。

「んじゃ、ついでに強さの秘密も教えてくれよ。」

自分より年下のヴィントの強さの秘密が気になっていたロートはついでとばかりに便乗する。

「なら、こっちからも条件が一つある。」

「ん、なんだ？」

「どうして義賊なんかしてるんだ？」

ヴィントの言葉にロートの表情が曇る。

「どうしても知りたいことや、それは？」

「……無理に、とは言えなさそうだな。ただ気になっただけさ。」

ロートの心情を悟ったヴィントは伸びをして立ち上がる。

どこことなく微妙な雰囲気になり、複雑そうな表情のロートと立ち上がったヴィントを交互に見てオロオロするアプリル。

それなりに時間が経ったにも関わらず、いまだに目を覚まさない二人の間を見つめるロート。

「……俺たちは捨て子だったんだ。」

ぽつり、と独白のように喋り出したロートに二人は視線を向ける

「ロート……」

「決して気持ちの良くない昔語りを結果的には、お前にさせたんだしな……俺の話も面白おかしいモンじゃないぜ。」

「……」

ロートの昔語りが始まった。

+

+

+

北の大国、ノルデン帝国が俺らの生まれ故郷さ。

お前ならノルデンの情勢もある程度判るだろ？

まア、俺は運の良いことに良識ある領主の治める領地のある孤児院の前に捨てられて、そこで育った。

あいつらも同じさ……最初の頃は贅沢な暮らしからはかけ離れていても、優しい院長と血は繋がってなくても家族のようなみんなと笑顔で毎日過ごしてた。

今から十年ぐらい前か……俺らが十二歳になった頃、領主が亡くなってその息子が新しい領主になったのが、ささやかな倖せの毎日の終わりだった。

新たな領主は多大な税を徴収して私腹を肥やすクズ野郎で、今まで少しながらも援助してくれてた前領主と違い、税を納めるように言ってきやがった。

俺たちは必死に働いて孤児院を維持させようとしたけど……そんな中で院長が体を壊した。

なんとかギリギリで運営していた孤児院も院長が倒れてからは……それは悲惨なものだ。

ギリギリの稼ぎじゃ足りないと思った俺は、孤児院の中でも腕っぷしの強い奴らを集めてアンペルを結成したのさ。

帝国内でばかり暴れると孤児院に被害が及ぶと思った俺たちは大陸中で盗みを働くことにした。

あくどい領主や貴族、商人の奴らの金を奪うってな。

その道程で帝国内だけでなく大陸各地にも同じ境遇にいる人たちがいることを知り、自分たちの孤児院だけでなく、他の困っている人たちも……ってな。

それが義賊をやっている俺らの――

「――始まりだ。」

ロートの話を聞いていたヴィントは黙り込み、アプリルは涙ぐんでた。

「ぐす、ヴィオさん、ロートさんたちに義賊をさせてあげましょう……」

否、号泣だった。

「それでも良いが、ロートの所の領主はそのまま私腹を肥やすだけだぞ。」

「それは……」

ヴィントの言葉にアプリルは黙り込む。

ロートたちが一番許せない領主は結局、なんの痛手も負わせることができないのだ。

「俺もそれは納得いかないが、孤児院に迷惑は掛けられない。」

孤児院の為という大義名分はあっても殺しだけはしないアンペル。

血に塗れた金などで孤児院を再建させたくはないからだ。

「俺に任せな。その葛藤を晴らしてやるよ。」

ヴィントはニヤリと笑うと宙空に魔法陣を描き始めた。

「どうする気だ？」

「そういう手合いは上からの圧力に弱いってのが相場ってことだ。」

「「？」」

ヴィントの意味深な言葉にクエスチョンマークを浮かべる二人。

そんな二人を尻目にさらさらと直径五十センチほどの魔法陣を描

き上げ、魔力を通す。

「よし！ 繋がった。」

『……今、執務中なんだけど、ヴィオ。』

「まア、そう言うなって……リンケ。」

魔法陣から気怠しそうな声が聞こえる。

その声の主に対して気軽に声を掛けるヴィント。

「ちょ、オイ……リンケってあの？」

「誰ですか？」

声の主の名前を聞き、小声でかつ叫ぶという器用な真似をするロートとその声の主を訊ねるアプリル。

「要はノルデン帝国のお偉いさんだ。」

「ふえーすごい人ってことですね。」

「ああ、すごい人だ。どうすごいかって言うと――」

傍らでどこか間抜けな会話をしている二人を半ば無視して話を続けるヴィント。

『そんなのはこの国じゃ日常茶飯事なんだけど……』

「それを無くそうとしている人間の言葉か、それ。」

『冗談だよ。判った、近日中に対応しておくよ。』

「サンキュー。今度菓子折りもって顔だすわ。」

『遠慮しておく。貸しにしておくからいつか倍にして返してよ。』

リンケの言葉が終わると同時に魔法陣が消える。」

「あ、あの野郎……強制解除しやがったな。」

ヴィントは宙空に恨み節を呟く。

気持ちを切り替えて振り返ると何故か魚の料理方法について話し合う二人。

「何話してんの？」

「魚の美味しい食べ方についてだ。」

「あっそ……孤児院についてはもう安心していいぞ。あいつなら領主に何かしらの制限をかけて助成金も出してくれるだろ。」

「本当か!？」

「ああ、だから安心して王宮に行ってくれ。」

「おうよ、任しておけ!」

後顧の憂いが無くなったロートは威勢の良い返事をする。

「期間は……半年。半年で俺は父親を見つけて帰ってくるから、それまで母さんを頼んだ。」

「了解。……あ、そういえばお前の強さの秘密を聞いてないぞ。」

「ん？ それなら母さんに会えば判るさ。あの人が俺の師でもあるから……剣技と魔術の、な。」

「……なあ、その人に護衛いるのか？」

「一応さ。さて、あいつ等を起こしてやるか。」

ヴィントは倒れたままであるアンペルの二人と盗賊たちを見やる。

「そういえばあいつ等、あの騒ぎの中でよく目を覚まさないな……」

ロートが当然の疑問を投げかける。

「俺が魔術で強制睡眠掛けてるからな。俺が効力を解かなきゃ目は覚まさねーよ。」

「なら、何で俺は目を覚ませたんだ？」

「唯一俺のことを認識してから気絶したんで魔術は掛けなかったんだ。」

しれっと、三対一はキツイしな、と言って歩いていくヴィントに

啞然とするロート。

その後、ヴィントはアンペルの残り二人と盗賊たちを叩き起こした。

アンペルの二人には大部分を端折ったの説明をし、盗賊たちを途中の街で軍に引き渡すようにと話す。

+

+

+

オステン側の森の出口までロートたちを見送りにきたヴィントは、離れていく背中に向かって声を張り上げる。

「それじゃ頼んだぞっ、ロート！」

「お前も父親探し頑張れよっ、ヴィオ！」

初めて愛称を呼んだロートに、アイツ……と小さく口の中で呟いた。

「さようなら」

アプ Ril も大声で別れの挨拶をする。

そこでヴィントは頭の隅に追いやっていたことを思い出す。

——この娘のことすっかり忘れてた。この後どうしようか……

名前しか判らない少女は健気に背中が見えなくなるまで手を振っていた。

第一章：第八話：それぞれの理由（後書き）

これで第一章は終わり、かなあ？

区切りが良いところで終わらすとなると、もう一話書かないといけないと思い、急ぎ足で書き上げた結果、今のところ最長になりました。

そして、アプリルについて触れてない。（汗）

それと、補足したいことが……

もう一話続けるか、間章に回すかは書き上げてから決めます。

でも、一段落は着きました。

次話もよろしく願います。

第一章：第九話：旅の同伴者（前書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。

第九話です。

第一章：第九話：旅の同伴者

ロートたちの後ろ姿も見えなくなり、手を振るのを止めたアプリルがヴィントの方をチラリと見やる。

「ん、どうした？」

「へ、あっあの……どうしたってわけじゃないんですけど……」

段々と声が尻すぼみになっていく少女。

どうやら急にヴィントと二人きりになったことを思い出したようだ。

先ほどまでは王族に対しても恐縮しなかったロートがいたからか、特に意識し過ぎることもなかったが今は違う。

「さて、これからどうしたもんか……」

「えっと、父親探しに行くんじゃないんですか？」

頭の後ろで手を組みながらぼやくヴィントに、アプリルは頭を傾げる。

「いや、俺じゃなくて君のこと。」

「へ、私ですか!？」

ヴィントの言葉に驚くアプリル。

「そ。そういや、どうしてあんな場所に一人でいたんだ？」

いくら昼間とはいえ森の奥など、とても安全な場所とは言えないだろう。

今回は偶然にもアンペルという助けが入ったから良かったものの、普段なら魔物や――

「えーと……ウサギを追いかけてたら森の奥まで迷い込んだじゃって、そしたら盗賊の人たちに襲われそうになって……」

――それこそ盗賊に襲われて命を落とす危険もある。

「で、ロートたちが助けてくれた。と……」

「はい……」

アプリルの説明にヴィントは心の中で大きく息を吐く。

「あーそれは判ったが、俺が聞きたかったのはどうして森に、ってことだ。まさか散歩してたわけでもないだろ？」

「あつ、……シェントウム共和国に薬を買いに行く途中で……」

「……薬を買いに？」

「はい、私の母親が少し前からちよつと難病に罹って……その病氣

を治す薬がシェントウルム共和国にいけば手に入るらしくて……」

「まア、シェントウルム共和国には大陸中から様々な物資が集まるしな……だが、隣国とは言っても女の一人旅は危険だぞ。特に国境沿いは盗賊たちの縄張りで……」

ヴィントは如何に危ないかを話し、アプリルは顔を塞ぐ。

「でも私が行くしかないんです！」

「!？」

ヴィントの言葉をいきなり遮り、瞳に涙を溜めたアプリルは大きな声で叫ぶ。

「危ないことなんて私だって判ってますよ！ でも！ ……日に日に弱っていくお母さんに何もすることができない私がいて、私よりも幼い妹がいつも気丈に振る舞って……でも、夜中に泣いているのを見て、じっとなんかしてられなかったの！」

瞳に溜まっていた涙は溢れ、慟哭する少女。

地面にしゃがみ込み、子どものように泣く少女にヴィントは戸惑う。

その間もアプリルは啜り泣いている。

そんな姿を見て、ヴィントはしゃがんでアプリルの頭を優しく撫でる。

「ぐすっ……?」

「悪かった。大して事情も知らないのに……君の気持ちも考えないで無神経だったな、俺。」

頭を撫でられて少し落ち着いたのか、アプリルは顔を上げて首をフルフルと横に振り、ヴィントは手を頭から降ろした。

「あ……」

するとアプリルは少し寂しそうにする。

「ん? どうした?」

「えっと……」

優しく問いかけるヴィントの言葉に言い淀むアプリル。

そんなやり取りに心の中で首を傾げたヴィントは、再びアプリルの頭を撫でた。

「ふえ……」

「ん? 頭を撫でられるのは嫌だったか?」

「いえ……私が小さい頃泣いたときは、よくお母さんが抱きしめながら頭を撫でてくれたか——」

——安心するんです。

アプリルの言葉はヴィントの胸の中で消える。

「今日はいろんなことがあったろ？ それから残してきた家族のことも、これからの旅路も不安だろ？ だから、思い切り泣け。それですっきりしたら――」

ヴィントは抱きしめた少女の背中も優しく撫でる。

「――俺と一緒に旅してやる。」

その言葉に今まで抱えていた様々な感情がアプリルの中で弾け、少女は自分からもヴィントに抱きつく。

いきなりの抱きつきに、ヴィントは態勢を崩して地面に倒れ込むが、胸の中の少女は構うことなく再び泣き始めた。

+

+

+

十数分後。

アプリルが泣き止み、どこかすっきりした顔を上げる。

「よう、すっきりしたみたいだな。」

「……はい。」

目元は腫れて鼻も真っ赤だが、可愛らしい笑顔を見せる少女にヴィントは一瞬見蕩れる。

「……ん、んじゃ、そろそろ起き上がるのでしょうか。」

「ふえ……」

ヴィントの言葉にアプリルはようやく現在の状況を理解した。

地面に倒れているヴィントとその上に覆い被さる自分。

「っ！！」

アプリルは顔を真っ赤にして立ち上がった。

「あ、あの、すすすみませんでした！」

「いや、気にすん『ぐううう』……」

お腹を盛大に鳴らしたアプリルは顔から湯気が出る一歩手前になった。

「……昼飯食べてないのか？」

いたたまれなくなったアプリルはヴィントの問いに小さく頷いた。

「とりあえず、ここから移動しようか……少し先に馬を置いてきたままなんだ。そこで今後の話でしょう。それで良いか？」

蚊の鳴くような声でアプ ril は返事をした。

+

+

+

先ほどヴィントが休憩を取っていた場所までやってきた二人。

「あの木の下だ。」

ヴィントの指差す先を見てアプ ril は違和感を感じる。

何か無理やり意識が外されるというか、意識を集中しなければ一瞬で意識が外れて違う所を見てる事に気付くアプ ril 。

多分、指差されなければ気付くこともなかっただろう。

それにどうやら記憶に霞が掛かるのか、一瞬何を考えていたのか分からなくなる。

「んん……」

「ああ、認識阻害の魔術を掛けてあったのを忘れてた……」

何だか四苦八苦して目を細めているアプ ril を見て、ヴィントは

思い出したかのように解除をする。

目の前の空間に罅が入ったかと思うと『パリーイーン』という硝子が碎けるような音とともに碎け散った。

すると、今まで何もなかった木の下に馬が一頭現れた。

「あ、ちゃんと見える……」

「あそこで昼寝でもしようと思って盗賊や魔物対策で魔法陣を描いたままだった。」

ヴィントは何でもないかのように言うが、ここに魔術に精通したものがいれば目を見開いただろう。

ただでさえ扱うのが難しい魔法陣を昼寝理由で使うなんて、と……

「危ないですもんね……」

そんなことは露知らずあっさり流すアプリル。

二人は木の下までやってくると腰を下ろした。

「改めて……俺の名前はヴィント・シュタート・ナトゥーア。だけど、本名で呼ばれると色々と拙いんで、ヴィオって呼んでくれ。あ、もう一度言うけど敬語はいらないし、畏まった態度も取らないでくれ。自然に話しかけてくれた方が俺としては有り難いから。」

「えっと……私の名前はアプリル・フリーリング。私のことは――」

アプリルは一度言葉を止め、何かを決意するかのように手をギュッと握る。

「——リルって呼んでね、ヴィオ。」

花が咲いたような笑顔で手を差し出すアプリル。

「お、おう。これからよろしくな、リル。」

ヴィントも笑顔で差し出された手を握った。

ぐううう……

ピシッとアプリルの笑顔が凍った。

「そういえば昼飯を食いにここに来たんだったな。景気づけに今すぐ美味しいを用意してやるから待ってろ！」

ヴィントが慌ててフォローするが、果たしてその言葉は目の前の少女に届いたのだろうか……

それから少女はヴィントが用意したシチューの匂いが鼻孔を刺激するまで動かなかった。

第一章：第九話：旅の同伴者（後書き）

とりあえず、この九話で第一章を終えようと思ってるのですが、何となく納得いかないのでもしかしたら加筆修正するかもしれません。

その時は最新話でお知らせします。

するかなあ？

間章：ロートの受難（前書き）

お待たせしたので一日に一挙二話公開です。

感想に誤字脱字の報告をお待ちしております。

間章：ロートの受難

ヴィントと別れてから一日後。

「なんか盗み以外で城とかに入るの初めてだな。」

「阿呆、もう城内に入ったんだ。言葉には気をつけろ。」

ゲルプとブラウのやり取りを聞きながらロートは先ほどの門番の対応を思い出す。

——国民からの人気は高くても城内での人望は無しか……

ヴィントからの王家の紋章が入った紹介状を見せたときの門番の顔は蔑んだ顔が全てを語っていた。

現在、アンペルの三人は門番の詰所の中にある小部屋にいた。

王家の人間への客人への対応とは思えない。

ここからもヴィントのことを軽視していることが伺える。

コンコンコン

ノックの音にロートは思考の海から戻る。

「どうぞ。」

「失礼します。」

ドア越しにでも判る澄んだ声の持ち主がドアを開けた。

燕尾服を着た蒼銀の髪を結い上げた若い女性……ゼクレはエメラルドグリーンの瞳で室内を一瞥すると一歩下がり、ドアを押さえる。

そして、一人の美しい女性が金色の髪を靡かせて室内に入ってきた。

三人は息を飲んだ。

「どうやら息子……ヴィントがお世話になったようで……あ、申し遅れましたが私はシエロ。こっちはゼクレ。」

三人は鈴が鳴るような美しい声に聴き惚れる前に、目の前の女性の口から発せられた言葉に耳を疑った。

「あんたがヴィオの母親？」

ロートは思わず立ち上がった。

「ええ、そうよ。正真正銘ヴィオの実母よ。」

「？」

急に雰囲気が変わったことに疑問を感じるロートを見てニヤリと笑うシエロ。

余計に訝しむロートにシエロは言葉を紡ぐ。

「うちの息子を愛称で呼んでるってことはそれなりに信用されてん
でしょ？ まア、そうじゃなきゃ私のところに寄越さないでしょう
けど。」

シエロの言葉を聞いてなんとなく人となりが掴めたロート。

——どうやら頭は回るみたいだ。それに貴族特有の嫌味も無い。

「一応な。」

ロートは口元を緩めて答え、ヴィントとの経緯を話す。

+

+

+

「——で、あんたがヴィオの師匠って聞いたんだが、本当か？」

一通り話したロートは最後に気になっていた質問を投げかける。

「まあね。なんなら確かめてみる？」

「いや、遠慮しとくよ……」

戦い好きのロートとしても、昨日の今日でというのとヴィントの

師匠とはいえ、自分がこれから仕える人間（しかも女性）と戦う気にはならなかった。

「それじゃシエロ。私の部屋から着替え持ってきて。私たちは先に……今の時間ってどこか演習場空いてるかしら？」

「へ？」

「今の時間は第一から第四まで埋まっているかと……」

間抜けな声を出すロートが無視して、今まで沈黙を守り通していたゼクレが答える。

「なら、めんどくさいけど……久しぶりにあそこでいっか。」

「あの……俺、遠慮するって……」

「いつ襲われるか判らない世界で生きてきたんだからつべこべ言わない。」

言っていることは正論だが、どこかウキウキしている目の前の女性をみてロートは悟った。

——こいつ、バトルテイスター戦闘嗜好者か！？

「もうめんどくさいから着替えはいいわ。イルズイオン・ラウム幻想空間」

グニヤリと空間が歪み、すぐに戻るとそこには誰もいなかった。

+

+

+

「あれ、ここは……？」

空も地面も灰色の何もない世界に五人だけが、ぽつんという。

「……どうやら時空間干涉系らしいな。ここは差し詰め、彼女の世界だな。」

ゲルプの疑問にブラウは驚愕しながらも答える。

アンペル内で唯一魔術が使えるブラウは興味深げに辺りを見回す。

ちなみにロートはリーダーで戦闘担当、ブラウが魔術担当、ゲルプは潜入担当だ。

——そりゃヴィオも刻印魔術を使いこなすぐらいだから母親も同等かそれ以上って予想できてもこれは……

「反則だろ……何だよ、時空間干涉系を無詠唱って……」

「さて、まずはあなたたちの実力の把握からかしらね。」

項垂れるロートを無視してシエロは話を進める。

「デーゲン。」

シエロの言葉に虚空から一振りの剣が現れる。

それをシエロが掴んだ瞬間、とんでもないプレッシャーを感じる三人。

「!?!」

殺気は感じられないが、精神的重圧が肉体にまで干渉しているように感じられた。

ヴィントも強かったが、シエロは次元が違う。

「構えなさい。まずは赤髪の……ロートだったわね。あなたから^手ぶしてあげる。」

シエロの言葉にロートは言い知れぬ不安を感じた。

そして、それは正しかった。

もし、ヴィントがこの場にいたのならシエロの言葉を意識できただろう。

シエロの後ろに佇むゼクレも彼女の言葉を意識し、憐みを込めた視線をロートに送る

その意味にロートは後ほど気付くのだった。

「ゼクレ、私は三人を適当に半殺しに^{揉んでいく}するから治癒魔術よろしく!」

ゼクレが頷き、地面に刻印魔術——治癒効果と障壁の効果のある魔法陣——を描き始めたの確認すると、満面の笑顔を浮かべた。

「逝くわよ♪」

三人は後に語る。

あれは悪魔の笑みだったと……

+

+

+

結果から言うと三人は、数時間で数えきれないぐらい死にかけた。

ゼクレは三人をそれぞれ十回治癒した辺りから数えるのを止めた。

致命傷だけ直接治し、細かい傷を魔法陣の効力に任せたゼクレは、近くで優雅にティータイムを楽しんでいるシエロの元へと歩み寄る。

驚くことに彼女のドレスには破けたところも血の一滴の汚れもついていない。

——あー端から見るとホントに地獄よね、アレ。まア、まだ四肢切断がないだけましね。

すでに悟りのレベルまで至ったゼクレから見れば今回の地獄もまだ救いようがある。

一番救いようのないのは、目の前の加虐嗜好者^{サディスト}だろう。

通常、治癒魔術では傷を治しても失われた血を補填することはできない。

では何故、致命傷を何度も負った三人が失血死をしなかったかというと、シエロは三人を切った際に飛び散る血や流れ出る血は空中に留めて自己輸血に利用し、切り裂かれた傷はすぐさま応急処置だけするなど徹底した管理を行っていたからだ。

そのため、ゼクレの役目はもっぱら、打撲や骨折に内臓破裂、火傷や凍傷などの治癒だった。

手っ取り早く強くなるにはこれが一番と幼少期から修行を受け続けたヴィントとゼクレの強さはいつしか尋常ではなく異常になったのだからシエロは正しいと言えるば正しいのだろう。

故事にも、獅子は我が子を千尋の谷に落とすとあるのでシエロだけが狂っているわけではない……ただ、彼らが落とされたのは地獄だったただけだ。

ちなみに後日、その話を聞いたロートは顔を青ざめ、一番辛い修行内容は何かとゼクレに聞くと、いつもは泰然自若としている彼女はわなわなと震え、シエロに訊ねれば、えへへと少女のような笑顔で返された。

ここ数日ですでにシエロの笑顔の意図が判るようになったロート

は、ここに送り込んだヴィントを恨んだのだった。

つづく？

間章：ロートの受難（後書き）

結局もう一話書き上げてからの間章になりました。

しかもロートにスポットが！笑

ついでにヴィントの強さの秘密が……

まア、こういうことです。

第二章はシェントウルム共和国編ということで、満を持して（？）
あの娘の登場です。笑

次回もよろしくお願いします。

第二章：第一話：既視感（前書き）

お待たせしました。

第二章突入です。

感想に誤字脱字の報告をお待ちしております。

第二章：第一話：既視感

「ふう……美味しかった。」

「そりゃよかった。ほれ。」

シチューの入った大皿に黙々とスプーンを突っ込んで口には運ぶという作業を繰り返していたアプ ril は、最後の一口を嚥下して溜息を吐き、感想を一言。

そんなアプ ril の姿を紅茶を飲みながら眺めていたヴィントは、新しいカップに紅茶を注ぐ。

「ありがとう。」

「どういたしまして。食器下げるから貸してくれ。」

「あ、うん。」

アプ ril から食器を受け取ったヴィントは、魔術で水を呼び出してあつという間に綺麗にした。

「魔術って便利なんだね。」

「まア、こんな使い方してる奴もあんまりいないだろうけどな。」

感嘆の声を上げるアプ ril に食器を拭きながら応えるヴィント。

実際にこの大陸での魔術の活用方法はもっぱら戦闘にのみ使われ

ている。

食器を拭き終わったヴィントは、傍らにある縦60cm、横90cm、高さ80cmほどの木造の宝箱の形をした箱に食器をしまう。

「その箱も魔術？」

アプリルは魔法陣の上に佇む箱を指差して訊ねる。

「ああ、無限の箱エントリツヒ・シヤハテルっていう魔術だ。この箱の中は無限大に広がっていて、さらに箱の中では時の流れが止まっているから食べ物も腐ったりしない。」

「本当に便利だねえ……」

目を丸くして驚くアプリルにヴィントは苦笑する。

「いや、この箱にもいくつか制限があって、生物や箱より大きい物は容れられないし、何が入ってるか覚えておかないと容れた物を出せないとか……他にも細かい制限はあるけど大まかにはこんな所か。リルが食べたシチューも王宮のコックが作ったものをしまっただんだ。」

「わ、王宮の人達ってあんなに美味しい料理を毎日食べてんだあ……」

「その代わりに毒殺おびやに脅かされる毎日だけだな。」

王宮での食事に思いを馳せる少女にさらりと現実を突きつけるヴィント。

アプリルは引きつった顔でお腹に手を当てる。

だが、ヴィントの言葉には語弊がある。

毒殺に脅かされていたのはヴィントとシエロだけで、他の王宮内の人間にはそんな心配はない。

「ええーつと……」

「今食ったシチューなら安全の保障はされているから大丈夫だぞ。」

「あはは……」

乾いた笑いしか出てこないアプリルだった。

+

+

+

一息入れた二人は旅路の支度をする。

「さて、そろそろ出発しないと国境は越えられても日没までに一番近い街に入れないな。」

「ごめんね、私のせいで大分遅れちゃったよね……」

荷物を片付け手ぶらになったヴィントは、馬の手綱を握りながら何と無しに言う、それを聞いてしゅんとするアプ Ril。

「気にすんな。拾った責任はちゃんと取らないとな。」

「……」

「場を和ます冗談だ。だからそんな目でこっちを見るな。」

ジト目で睨むアプ Ril から視線を外しながらどうどうとジェスチャーするヴィント。

その姿に表情を緩めるアプ Ril。

「もう……」

「ほら、先に馬に乗ってくれ。」

「うん。よいしょ！ ……私、馬に乗るの初めてだ。」

「慣れない内は乗り心地悪いから覚悟しておけ。よっ！」

期待感に胸を膨らませるアプ Ril に現実を突きつけたヴィントも馬の後ろ側に跨り手綱を握る。

「よし、行くぞ！」

「うん！」

二人を乗せた馬は緩やかに脚を進める。

道中をとりとめもない話で花を咲かせるヴィントとアプリル。

「そうだ、リルって今何歳？ 俺とあんまり変わらない気がするけど……」

「16だよ。ヴィオは？」

「17だ。」

「1歳違いだね。」

「そうだな。」

「あ、ヴィオって——」

そんな朗らかな雰囲気にも包まれる二人に近寄る影が忍び寄る。

「……」

「急に黙ってどうしたの？」

「ん？ いや、どうしようかなと思って。」

今までの地獄の修行で見出された超感覚とも言えるべきモノが働いたヴィントは臨戦態勢に入った。

「そうだね、いきなりこんな質問されても迷っちゃうよねえ。でも、私は——」

アプリルとの雑談に意識を3割、周囲に意識を巡らせるのに7割と思考を分割させる。

——この気配は魔物か……国境沿いのこの森に生息して、かつ群れるのは……ヴォルフ人狼。

ヴォルフ人狼と呼ばれる魔物は狼が二足歩行したような姿で、鋭い爪と牙を持ち、体長は二メートルに迫らんとする獣人タイプの魔物である。

特徴としては十頭前後で群れをなし、原始的ながらも武器を持つ。

主に森深くに生息するが、稀に人里に下りては人間を襲い、獰猛ながらも知能が高くてチームプレーもするので危険度はかなり高い。

「ねえ、聞いてる？」

「ああ、悪い……ちょっと考え事してた。」

振り向いて少し不満気なアプリルに、思考の海から戻されたヴィントはばつが悪そうにする。

その時、少し離れた所から「ワオーン」という鳴き声が聴こえた。

「い、今の鳴き声って……?」

ヴォルフ
「人狼の狩りの合図だな。」

身を竦めたアプリルが怯えながら瞳を揺らす。

ヴィントが答えると、アプリルの体が異様に震えた。

「? どうした、リル?」

疑問に感じたヴィントが問いかけるが、アプリルは反応せずに歯をガチガチと鳴らす。

ただならない様子を感じたヴィントはアプリルを抱きかかえて馬を駆けさせる。

「舌を噛むなよっ!」

ヴォルフ
後ろからは人狼が追いかけてくる気配がする。

森の中を駆け抜けながら思考を巡らせるヴィント。

ヴォルフ
——人狼の群れぐらいなら俺一人でも何とかなるが、リルがこの調子だと足手まといにしかない。頭の良い奴らだ。絶対にリルから狙ってくる。とにかく魔術で牽制して——

ヒュンツ

「!？」

「ヒヒ——ン!？」

風切り音が聴こえたと思ったら時すでに遅く、ヴォルフ人狼の投げた石が馬の脚に刺さり、派手に転倒した。

何とかアプ ril を抱きかかえて倒れたヴィントは、素早く態勢を整えて剣を抜く。

右手に剣、左手に魔力を込める。

傍らのアプ ril はうつ伏せに倒れてピクリともしない。

どうやら落馬の衝撃で気絶したようだ。

その姿を見て既視感を覚えるヴィント。

——いつだ、俺はこの光景を見たことがある？ 思い出せ！ 俺はこの後の出来事を後悔して——

「痛っ!？」

すでに戦闘は始まっているのに、目の前の敵に集中していなかったヴィントの左手に石が当たった。

痛みに顔を歪めるは一瞬、すぐさま臨戦態勢に入ったヴィントの目に映ったのは、今にもアプ ril を鋭い爪で切り裂かんとするヴォルフ人狼の姿……

「――っ!？」

自分にも人狼ヴォルフの攻撃が迫っているのを無視して、必死に剣を振る
ヴィント。

アプリルへ爪が到達するよりも速く、ギリギリで人狼ヴォルフの首を刎ね
たが、慣性の法則で伸ばされたままの腕の先にある爪が――

幼キ少女ノ背中ヲ切り裂イテ鮮血ヲ撒キ散ラシタ。

ソレハ幼キ日ノ少年ガ驕心ヲ持チ続ケタタメニ起キタ出来事。

第二章：第一話：既視感（後書き）

最後に

b i b l i o m a n i a 様

分かり難かった文章のご指摘ありがとうございました。

次話は順調にいけば、今夜にでも投稿します。

最悪でも土曜日には投稿します。

では、今後もしよろしく願います。

第二章：第二話：愛おしい人（前書き）

まずはじめに、

b i b l i o m a n i a 様

誤字脱字のご指摘ありがとうございました。

今回の話は長すぎたので二話に分割しました。

後半が短く急ぎ足だったので納得いかずに加筆しました。

だから投稿が早くできたのですが、自分の中では結局一話目なんですよね、この話も。

ともかく、第二話をお楽しみ頂けたら幸いです。

第二章：第二話：愛おしい人

幼キ少女ノ背中ヲ切り裂イテ鮮血ヲ撒キ散ラシタ。

ソレハ幼キ日ノ少年ガ驕心ヲ持チ続ケタタメニ起キタ出来事。

「
ウ
ワ
ア
ア
ア
ー
ー
ー
!!
!!
!!
」

ドンツ

——アプリルの背中のすぐ真上で吹き飛んでいった。

「ハッ!？」

絶叫と共にヴィントの昂った魔力が体から溢れ出て周囲を蹂躪した。

ヴィントが意識を戻すと、魔力の暴走により自分を中心に周囲の木々はなぎ倒され、大打撃を受けた人狼ヴォルフの群れが壊滅状態に陥っていた。

首無しの人狼ヴォルフの死体は間近で暴走の煽りを受けたせい、少し離れた所で随分とずたばろになっていた。

「ハアハア……痛う……」

無茶な魔力の行使をしたせいで全身に激痛が走るヴィント。

何とか意識を保ってアプリルの様子を伺う。

不思議なことにアプリルの周囲は魔力の暴走の被害を受けなかったようで、傍らの馬も脚の怪我以外は無事だ。

アプリルも服が切り裂かれて背中がパツクリ見えているだけで、怪我をした様子は見受けられない。

ただ、それは今回の話だ。

少女の白い背中には、昔に鋭い爪で切り裂かれただろう傷痕が痛々しく残っていた。

ヴィントがアプリルを抱きかかえると、所謂お姫様抱いわゆるっこの状態になった。

「うう……あ、れ……ヴィ、オ？」

すると、意識を取り戻したアプリルがぼーっとした視線でヴィントを見つめる。

「いつの間にか心の奥底に沈めてたんだな……これは俺の過ちなのに……」

「……？ ヴィオ？」

「でも、心の何処かで告げてたんだろうな。リルを見捨てるなんてだから旅を……」

言葉は消える。

「どうし、て……そんな、辛そ……うな、顔してるの？」

「それで赦してくれなんて言わない、言えない。でも……背中の傷は——」

——俺の

独白のような告白をアプリルは、人差し指をヴィントの唇に当てて遮る。

突然の感触にヴィントが閉じていた目を見開くと、そこには弱々しながらも穏やかな微笑みを浮かべるアプリルの顔が映った。

「……赦すも、何も……初め、から……私は、君の、こと……怨んでなんか、いなかったよ。」

「リ、ル……」

「むしろ、君は……私を、助けてくれた……初恋ヒーローの男の子なんだから。」

目を潤ませる腕の中の少女を少年はどこまでも愛おしく思った。

「……」

「だから……うわぷっ!？」

今度はヴィントがアプリルの言葉を遮った。

突然の抱擁で……

アプリルは地面に足を付けた状態でぎゅっとヴィントに抱きしめられる。

「今の今まで記憶の奥底にあったけど、あの別れた後に必死に魔術を学んで、どんな怪我也治せるようになったんだ。今度こそその背中の怪我を治すために……だから——」

ヴィントは抱擁を緩めるとアプリルの目を真剣に見つめる。

「うん、それじゃ……お願い、しようかな。」

言い終わると同時にアプリルも愛おしそうにヴィントの背中に腕を回し、コッソリと額を胸に預けた。

「ああ、任せてくれ。」

——You were born for all these people you love. 《愛されるために生まれてきた》

This world, full of precious people. 《そんな愛おしい人でいっぱいの世界》

To fulfill your love.
《あなたも愛するために》

Go, 《行こう》 “April” 《ア
プリル》

———アレスハイレン・ヒメル・ペーテン
全てを癒す空の祈り」

ヴィントが魔術名を唱えると世界は優しい光に満ちた。

本来なら、どんな死の淵にいる怪我人でも回復させることができ
アレスハイレン・ヒメル・ペーテン
る治癒系魔術最高峰の全てを癒す空の祈りを慈しみを持って唱えた
ヴィントはアプリルの頭に口付けをした。

通常の治癒魔術では補填できない血の回復や失われた四肢や臓器
の回復もできる。

例え体の半分が消え去っても、生きていれば回復させることができ
る……それは、すでに修復の域だ。

もう復元と言っても良いだろう。

そこにゼクレは勿論、シエロも到達できていない頂。いまだき

そんな魔術まじくほうを目の前の女の子が持つには痛々しすぎる古傷を持っ
た少女に使う。

それは償い。

それは幼き日に交わした約束。

それは――

「――!？」

驚くアプリルの背中を淡い光が撫でた。

+

+

+

昔の話。

一人の少年は母親に深い森の中へ投げ込まれた。

手に持っているのは一本の剣。

少年はがむしゃらに一日一日を生き延びた。

初めは空腹を満たすことも大変だったが、いつしか獲物を捕まえるのが上手になった。

魔物の群れから命からがらに逃げていたのが、いつしか追い回す側になっていた。

少年は強さに酔っていた。

ある日、魔物の群れを返り討ちにし、追い打ちをかけていたら…
…一頭の魔物の前に

一人ノ少女ガイタ。

少女ノ手ニハ薬草ガ握ラレテイル。

興奮シテイル人狼^{ヴォルフ}ハ逃ゲル少女ニ鋭イ爪ヨ——

ズサッ

気が付クト少年ノ前ニハ滅多刺シニサレタ人狼^{ヴォルフ}ト血塗レノ少女。

少年ハ自分ガ使エル治癒魔術ヲ掛ケテ掛ケテ掛ケタ。

傷ハ塞ガッタガ…少女ノ背中ニハ痛々シイ痕ガ残ッタ。

少女ノ顔ガ…悲シミニ満チタ心ヲ隠シ、助ケテクレテ…アリガ
トウ、ト言ウソノ笑顔ガ少年ノ網膜ニ焼付イタ。

少年ハ深イ自責ノ念ニカラレタ。

それは、昔の話。

+

+

+

「背中……治ったの？」

「ああ、綺麗になった。」

顔を埋めて訊ねるアプリルの頭を撫でながら確認もせず答えるヴ
イント。

「そっか……」

「ああ……」

二人は静かに抱きしめたまま動かない。

「……そろそろ行かないと、ほんとに日が暮れちゃうよ?」

先に沈黙を破ったのはアプリルだった。

「そうだな……そろそろ行くか。」

二人は名残惜しそうに離れた。

ヴィントはアプリルにローブを出して着せると、馬の脚を治して出発の準備をした。

ヴィントはアプリルに目深くフードを被せる。

それから辺りに倒れている人狼ヴォルフに無表情でとどめを刺していく。

それは、溢れんばかりの感情の濁流に流されないように……

アプリルも何となくヴィントの心情を察し、ただひたすらローブの裾を握る。

その後、特に盗賊や魔物に遭遇することなくシェントウム共和国との国境を越えた。

そして、日没前には国境沿いの街、アンファングに着いた。

第二章：第二話：愛おしい人（後書き）

アレクサンダー・ヒメル・ペーテン
えー全てを癒す空の祈りの詠唱は特殊なので、英語ですが通常の魔術は違います。

それから、訳を読んですんなり落ちない方もいるかもしれませんが、本来は死の淵（三途の川辺り）を彷徨う人が現世（世界）に戻ってくるための詩ですので……そんなスゴイ魔術をリルに使ったんだ、
と思って下さい（汗）

誤字脱字に感想、評価お待ちしております。

第二章：第三話：ギルド（前書き）

今回の話は過去最高の長さです。

いつもの三倍あります。

では、お楽しみください。

第二章：第三話：ギルド

シエントウルム共和国にある北西の街アンファング。

ヴィントとアプリルは馬から下り、馬の手綱を引きながら歩いて行く。

日が沈んだ後も街には街灯が灯り、人々は商売や買い物に精を出している。

「もう日が沈んだのに賑やかだね。」

「ああ、ここはオステン王国との貿易が盛んな街だからな。街の規模も共和国内では大きい方だし。」

「あ、ねえねえ……あの光ってるのって何かな？」

アプリルは道端に等間隔で立っている街灯を指差して訊ねる。

「ん、あれは街灯って言ってズューデン自治区の技術だ。詳しくは知らないが昼間に光を集めて夜になると溜めていた光を灯す仕組みらしい。」

「ズューデン自治区って大陸の南にある所だね？　なんか大陸内で唯一“国”ってついてないのはどうしてなの？」

「それはズューデン自治区が五十年前に宗教間の対立からシエントウルム共和国から独立して出来た場所なんだ。まだ独立してから時間が経ってないから大陸内では自治区扱いだけど、共和国よりも広

い土地を持ってたから……数十年もしたら国として諸国に認められるんじゃないか？」

「ふーん……でも宗教観の対立ってズューデン自治区ってキルヒエ教じゃないの？」

頭にクエスチョンマークでも浮かべていそうな表情のアプリル。

『キルヒエ教』

ビューネ大陸で最も広い信仰を集めている《空の女神》を信奉する宗教である。

教会は大陸各地の街や村にあり、日曜日には学校を開いて子供たちに読み書きなどを教えたりもしている。（アプリルはここで読み書きを覚えた。）

大陸の中心であるシェントウム共和国の首都に総本山である《カテドラーレ大聖堂》がある。

「ああ、大多数はクルト教……ってのを信奉してるよ。まア、だから国って認められてないってのもあるが、シェントウム共和国から独立した際に支配国より多く国土を奪い取るぐらいだ。大陸内での地力は相当なもんだぞ。技術力では大陸一だしな。」

「へえ……それじゃシェントウム共和国とズューデン自治区って仲悪いの？」

「昔はいざごぎもあつたが今はそうでもないよ。シェントウム共和国は大陸内の貿易の要だしな。ただ、国家間のいざごぎは無くなっても個人間のいざごぎは今もあるらしい。」

「そうなんだ。他の国とは？」

「なんだ？　大陸情勢なんか気になるのか？」

「んーそうだね……今までは自分の村と近くの村ぐらいしか気にならなかったけど、こうやって国外に出たらちよつとはね……」

「成程な……それじゃ今いるシェントウム共和国から……この国は突出した資源は無く国土も狭いが、大陸の中心にあるから貿易で成り立ってる国だ。東のオステン王国からは鉄類や宝石などの鉱物資源、北のノルデン帝国からは牛や豚などの家畜、西のヴェステン国からは魔術具や魔法薬などの魔術関係の品物、南のズーデン自治区からは鉄砲や大砲なんかが集まって流れていくよ。だから国土は狭いけど全部の国に顔が利くし、周りも攻めようとは考えないかな。中立国なのはキルヒエ教の総本山である《カテドラーレ大聖堂》がある影響も大きいが……まア、あそこは所謂ところの聖地だしな。」

ヴィントは語尾に含みを持った言い方をするが、アプリルはそれに気付かずにただコクコクと頷く。

「ふむふむ……」

「北のノルデン帝国から……この国は広大な土地を生かした牧畜が盛んで、食用の家畜以外にも馬なんかも飼育している。それから広大な国土に見合った人口を持っていて徴兵制度も整っている。まア、要するに軍事力が高い。国家間の関係だと……オステン王国とは一応友好関係を結んでるけど。二つの国の国境にある標高が高く険しいベルク山脈があるから攻めて来れないだけで、実際はオステン王国の鉱物資源を欲しいてのが本音かな。ヴェステン国とは昔から仲

が悪くて国境付近は冷戦状態だな。理由は魔術至上主義と武力至上主義から……ズューデン自治区とは国挟んでるから直接は因縁が無いけど、あの技術力を欲しがってるだろうから何が起こるかは判らん。」

「ふむふむ……」

「で、西のヴェステン国は魔術大国だ。魔術を極めるならヴェステン国のクルーク魔術学院って言われているぐらいだ。魔術具や魔法薬の専攻国でもあるな。ここの国家間の関係だと……ノルデン帝国とはさっき言ったように陰悪でシェントウム共和国とは貿易国として仲は普通だな。ズューデン自治区とは科学と魔術で反りが合わないのか微妙だな……間にグロース湾があって直接国が繋がってないし、今のところお互いに干渉だな。まア、物事を極めようとする姿勢は同じだと俺は思うけどな。ちなみにオステン王国とは仲が良いぞ。うちからは魔法の触媒に使う宝石を輸出してるし、向こうはオステン王国の人間のクルーク魔術学院へ留学する者を受け入れてくれるしな……要は持ちつ持たれつだな。」

「ふむふむ……」

「……急ぎ足だったのは悪いが、あまり判ってないだろう？」

「ふえ！？　そ、そんなことないよ？」

「疑問形で返されても……ああ、最後に……ノルデン帝国は独裁政治、ヴェステン国は王政で十年周期の国民投票によって王が選ばれる、オステン王国も王政だが議会がある。シェントウム共和国とズューデン自治区は議会制の政治を取って、議長が実質的国のトップだな。」

「へえ、良く判ったような、そうじゃないような……」

「まア、頭の片隅にでも入ってればいいさ。」

「うん。」

ヴィントが頭をポンポンと軽く叩くとアプリルは嬉しそうに目を細める。

「あ、ここだ。」

「ん？　ここって？」

ヴィントの視線の先を追うとそこには、周りの店よりも大分立派な建物があった。

「ここは冒険者ギルドだ。道中に掛かるお金も馬鹿にならないからギルドに登録しようと思ってな。」

「冒険者ギルド……？」

「ああ、冒険者ってのは……簡単に説明するとビューネ大陸や異大陸の遺跡や未開の土地を冒険する人間のこと。まア、数十年前……ズューデン自治区が独立する前に南である遺跡が一人の人間によって発掘されたんだ。そこには今のズューデン自治区の技術力を大陸一に押し上げたあるものがあつたらしい。それを見つけた男は巨万の富を得て、現在のズューデン自治区の最高議長を務めている。」

「あるものって？」

「公表されてないから判らない。ただそのあるもの……旧時代の遺産を見つけた結果は今のズューデン自治区が証明している。それに遺産を発見したものはかなりの金額でズューデン自治区が買い取ってくれるらしい。」

所謂、技術の独占である。

「ズューデン自治区はその遺産を効率よく回収するために冒険者のギルドを各地に設立。今まで賞金稼ぎや傭兵だった者はこぞって冒険者ギルドに入ったわけさ。ギルドに入れば様々な情報が入るからな。まア、冒険者ギルドって言っても遺産の買い取り以外に賞金首や魔物の討伐なんかも請け負ってるけどな。」

ギルドの設立によりズューデン自治区は遺産のもたらす技術だけでなく、かなりの情報網を各国に巡らせた。

現在の国家間でのズューデン自治区の立ち位置はかなり高いとも言えるが、それは各国から疎まれている度合いも比例する。

どの国も国内にギルドなんか置きたくないが、需要には逆らえない。

実際に、国の手が届かない問題をギルドの人間が解決してくれたら、上納金の支払いも良かったりと扱いに困っているのが現状だ。

「ヴィオも冒険者になるの？」

「一応な。ギルドに入っておけばその地域の情報も判るしな。例えば、どこどこの街道は盗賊が出やすいとか。」

結果、ギルドは各地での運営を許可され、大勢の人間が一攫千金を夢見て冒険者になった。

「あ、旅を安全にするために？」

「そういうこと。ついでに馬も換金してもらう。」

「えっ？ どうして？」

「そりゃ……馬に乗ってたら如何にも“私はお金を持ってます”って見えるからだ。実際に馬は高いしな。だから、襲ってくるやつが多いんだ……特にシエントウルム共和国では。」

「そっかぁ……でも、何でシエントウルム共和国だと襲われるの？」

「それは、貿易が盛んな国だからかな……要するにシエントウルム共和国は大陸の中心にあるから商人がこの国に多く集まる。それを目当てに富豪も集まる。商人や富豪を狙って盗賊なんかがいたる所に潜んでるんだよ。」

「ふええ……中立国だからって安心できるわけじゃないんだね。」

「どこもそれなりにはな……さあ行こうか。ついでに宿屋の斡旋もしてもらわないとな。」

「それは大事だね！」

二人は馬を併設された馬小屋に預けてギルドの扉をくぐった。

+

+

+

二人が足を踏み込むとそこは紫煙と酒の臭いが立ち込める薄暗く騒がしい空間だった。

周囲を見渡せばガラの悪い男たちが数人、ニタニタと二人を見定めている。

その視線に晒されたアプリルは身を竦めた。

その姿を見たヴィントはアプリルを自分の体に引き寄せる。

「ヴィオ……？」

「悪い、こんな場所って判ってたら連れて来なかったんだが……」

「ん、大丈夫……だよ。」

二人が身を寄せて小声で話している姿を見て、愛を囁いていると勘違いした数人の男がちよっかいを出してくる。

「オイオイ、ニーちゃんよお。ここはお前エらみたいなガキがいちやつきに来るトコじゃねーぞ？」

「ゲハハ、それともギルドに依頼か？　なんなら俺らが受けてやんぜ。報酬は……そうだな、嬢ちゃんのカラダでどうだ？　ゲハハ！」

お前こんなガキが趣味かよ！　という仲間のツツコミを受けて下卑た笑い声を上げる男たち。

アプリルは怖いやら悔しいやらで薄っすら涙を浮かべる。

それを見て今まで黙っていたヴィントが口を開く。

「消エロ。」

男たちは自分たちを射抜く視線とたった一言の言葉に一瞬たじろぐが、すぐに先ほどの調子に戻る。

「ンだと、お前エ！　伸されてエのか？　アア！？」

一人の男が腕を思い切り振り上げた。

「！？」

アプリルは思わず目を瞑った。

ドサッ

「ぐはっ！？」

何かが倒れた音がしてアプリルが恐る恐る目を開けると、先ほど腕を振り上げた男が仰向けに気絶していた。

「こ、小僧、一体……今何をした？」

仲間の一人が何が起こったか全く把握できないといった様子で訊ねる。

「それが判らないだったら今すぐそいつを連れてギルド（こゝ）から出てきな。二度目は斬る。」

ヴィントはそれだけ言い残すとアプリルの手を引いて受付まで足を運ぶ。

「ようこそ、本日はどのようなご用件で？」

受付ではギルドにはとても似つかわない妙齡の女性がいた。

「ギルドへの登録と馬の換金、それから宿の斡旋を。」

「かしこまりました。では、こちらの用紙に必要事項の記入と署名を。その後に簡単な審査などがありますので別室へお願いします。」

女性は一枚の紙をヴィントに渡す。

紙には名前の記入欄と性別や年齢、出身地の記入欄などがあった。

性別と年齢は正確にという注意書きがあるのに名前の欄には偽名も可と書いてあった。

但し、後の変更は不可能と書いてある。

そして、最後には本人が死んでもギルドは一切責任を負わないといった旨の文章が書いてあった。

ヴィントは最後まで記入すると紙を女性に渡す。

「ヴィオ・ライゼ様ですね。最後にこちらの結晶にご本人様の“血”を垂らしてギルドへの登録は終了になります。」

女性は透明に透過通った二つの六角水晶を取り出した。

「結晶に血を？」

「はい。ギルドではお一人につき一度限りの登録を受け付けています。これは、ギルドの不正利用を防ぐためと、ギルド登録者から犯罪者が出た際に結晶に記録された血……個体識別情報を使って犯罪者の位置の特定などを行います。」

「ん？ 詳しく聞いても良いですか？」

「はい。」

「一人につき一度ってのは判るけど、他のは？」

「はい。不正利用については、ギルドでは受け付けの際にこちらの結晶の提出を求めます。それからご本人様の髪の毛や血などをその

場で頂きます。それは、結晶に登録された血とご本人様の個体識別情報を確認します。これによって犯罪者による他人へのなりすましを防ぎます。」

「なるほど。」

「もう一つは、犯罪者がギルド登録をしていると判った際は、すぐさま本部に保管されている片割れの水晶が黒く染まり、各地のギルドの利用不可と場合によっては懸賞金を掛けます。さらに、ある特殊な装置により犯罪者の個体識別情報を探知して大まかな潜伏地域を特定します。」

「最後のは犯罪者が結晶を身に着けてなくても大丈夫なんですか？」

「はい。犯罪者が結晶を持っていた場合はかなりの範囲まで絞り込めますが、例えば結晶を捨てても犯罪者の“血”に反応しますので……精度は落ちますが。」

「そういうことか。説明ありがとうございます。」

「では、こちらに血を……」

女性は小さなナイフをカウンターに置いた。

ヴィントはそれを手に取ると人差し指を軽く切った。

そして、血を数滴結晶に落とした。

すると、結晶は鮮やかな紅に染まった。

「ありがとうございます。では、そちらを治療します。」

女性はそういつて一番簡単な治癒魔術を唱えた。

「どうも。」

「最後に別室にて身体測定と魔力量の測定をします。こちらへ。」

ヴィントは女性に案内されて別室へ歩いていく。

アプ Ril も慌ててそれに付いて行く。

案内されたのは様々な装置が置いてある部屋だった。

「ここは………？」

「こちらは測定室になります。これからそれぞれの機器の説明をします。指示に従ってご使用ください。」

「どうしてこんなことするんですか？」

不思議に思ったのかアプ Ril が訊ねる。

「ギルドではランク制度を取っておりまして、それにより登録者に見合った依頼の提供と犯罪者になった際の危険度の設定に使われます。ちなみにこの検査は常に最新の情報更新のために三ヶ月に一度程の周期で受けてもらいます。」

「なんかギルドって大変だね……」

「だな……」

二人は呆れた顔をした。

「規則です。では、まずこちらから……」

ヴィントは女性の隣に立ち説明を聞き始めた。

+

+

+

「……」

「どうしました？」

「驚きました……全能力が高いのもそうですが、魔力量が十八万オーバーって……確か現ギルド登録者の最高値がヴェステン国の魔術師団総指揮官のリーズィヒ様の二十一万……それに次ぐ記録じゃ……」

…」

「それってすごいんですか？」

紙と睨めっこをしながらブツブツと喋る女性におもわず訊ねるヴィント。

「すごいなんてもんじゃないですよ！ 大体各国の魔術師兵の魔力量平均が五百前後って言われてるんですよ。その中で十八万五千つて……三七〇倍ですよ。それに他の能力も突出しているのがいくつか……」

紙を改めて見直す女性。

「故障ってことは……」

ヴィントとしてはあまり目立ちたくないのも、一縷の望みをかける。

「昨日メンテナンスしたばかりです。更に言うと、魔力量の測定器は最新版です。」

女性は事実を突きつけた。

「ちなみにそれって俺も見れますか？」

「はい。どうぞ。」

ヴィントは渡された紙を恐る恐る見た。

ヴィオ・ライゼ

ダメージ・ヒットポイント

DM…12,300

魔力

SP…185,300

攻撃力…880

耐久力…220

筋力…330

敏捷…750

魔術能力…8,800

耐魔術能力…5,700

ギルド評価…A+

「これは、ええつと……」

「それでこちらがDランクの最低ラインです。」

そういつて女性はもう一枚の紙を渡す。

ちなみに一番下のランクはEランクだが、こちらは特に最低ラインの規定は無い。

ダメージ・ヒットポイント

DM…2,000

魔力
SP…500
攻撃力…100
耐久力…100
筋力…100
敏捷…100
魔術能力…100
耐魔術能力…100

ギルド評価…D

「殆ど百ですね。」

「比較しやすいのがありますが、それが妥当な数値だからです。」

「DAMとかSPは跳ね上がるけど、耐久力や筋力が跳ね上がらないのは？」

「それは、人間という生物には出せる限界値があるからです。ちなみに耐久力の最高値は今のところ三百二十で筋力が五百ですね。ともに、とても素敵な筋肉をお持ちでした。」

「は、は……」

「それからギルド評価の方ですが、それはほぼランクと同等です。ライゼ様のA+というのは、本来ならSランクと同等……いや、SPだけ見たらそれ以上ですが、ゴホン。Sランクの資質を持っているのですが、ギルドへの貢献度……遺産の発見やランクに見合った

賞金首や魔物の討伐をいくつかこなさなければなりません。なので、今回はAランク止まりになりました。」

「別に構いませんが……」

「Sランクはこの大陸で二十人に満たないんですよ。是非、取るべきかと。」

ちなみにAランクは八十人ほどである。

ギルドの登録者数は数万を超えるので、A、Sランクに至るのは相当狭き道である。

「はあ……」

「あ、オホン。Aランクからは周囲の注目を浴びやすく、同じギルド登録者からも名声を得るために目を付けられやすくなります。それを防ぐためにも“二つ名”を名前以外に登録できますが、どうなさいますか？」

「二つ名が付いていたら結局は注目を浴びませんか？」

ロートはギルドの登録していないが、その実力と戦闘スタイルな^{コメント}どから彗星の二つ名がいつの間にか付けられた。

その実力にランクを付けるとすればAランクのなかでも上位になるだろう。

ロート自身は名前を隠していないので二つ名と名前が有名になっているが、そういった人物はギルドにも何人かいることにはいる。

皆がシエロのような戦闘嗜好者なのだ。バトルテイスタ

「それはそうですが、ギルド内では登録者の質の向上のために毎月百位までのランキングを出します。そこで名前が載ってしまえますとギルド内での呼び出しや、最悪街中で名前を呼ばれただけでバレてしまう可能性があります……それでもよければ構いません。」

「確かに……」

——偽名で登録はしたもののファーストネームは愛称だしな。普通に街中でリルが名前を読んだだけでバレかねない。

ヴィント自身は戦いが嫌いではないが、戦闘嗜好者というわけでもなく、隣にはアプリルもいるので余計な面倒は避けたいと考えていた。バトルテイスタ

「何か良い二つ名は決まりましたか？」

「それじゃ——」

+

+

+

フロアに戻ってきた二人は依頼掲示板を見る。

掲示板には乱雑に依頼を要請する用紙が張り付けてあり、二人が色々と物色しているとそこには国境沿いの人狼ヴォルフの討伐依頼が出ていた。

「あ、これって……」

「ああ、今日のだな。」

「ええっと……討伐の証拠に人狼ヴォルフの肉体の一部など。で、報奨金額はいちじゅうひゃく……八十万!？」

アプリルの驚きの声上がる。

八十万あれば一般の四大家族が三ヶ月は生活できるだろう。

「やっぱり出てたか……受付に行こう、リル。」

「え、もしかして……」

「えー、馬の換金が二十万ゴルトと国境沿いの人狼ヴォルフの討伐達成の報奨金額が八十万ゴルト、合わせて百万ゴルトのお渡しになります。」

「どうも。」

ヴィントは先ほどの受付の女性から報奨金を受け取る。

ちゃっかりと人狼ヴォルフの肉体の一部を持って来ていたのだった。

「うわ、そんな大金初めて見たよ。」

ヴィントが手に持つ札束を見て驚くアプリル。

「俺も初めてだな……」

「え、そうなの？」

「ああ、普通はこんな金額を持ち歩くこ——」

「ヴィオ？」

アプリルは突然押し黙ったヴィントが気になり視線を札束から顔に移す。

そこには険しい顔をしたヴィントがいた。

「何の用だ？」

ヴィントは静かな声で言葉を発する。

「おっと、そんなに警戒しないでくれないかな？　今のはちょっとした挨拶みたいなものだからさ。」

アプリルが声のした方向へ振り向くと、そこには全身真っ白の柔和な笑みを浮かべる青年がいた。

顔立ちは整っていて眉目秀丽という言葉がよく似合い、微笑みを浮かべたその姿は優男と表せそうだ。

髪の毛は穢れを知らない雪のように真っ白で肌も白いため、薄暗いギルド内でかなりの異彩を放っている。

これだけ浮いていたら先ほどのヴィントたちのように絡まれそうだが、誰一人近づいてこない。

むしろ、遠巻きにひそひそと何かを話し合っている。

「挨拶？ 人様に殺気を向けるのか？」

その様子を尻目にヴィントは、アプリルを背中の後ろで庇うために一歩踏み出した。

「まあまあ……気を悪くさせたらごめんよ。でも、あの一瞬の小さな殺気に気付くとは……どうやら、ちゃんと能力に見合うだけの経験も積んでいるみたいだね。」

「……」

両手を上げて敵意のない様子を表す青年だが、ヴィントは警戒を緩めない。

「自己紹介が遅れたね。僕の名前はエンゲル。年齢は二十歳でランクはS。二つ名は――」

ニコニコと自己紹介をする青年の顔を見ていたアプリルは、エンゲルと名乗った青年と目が合った瞬間、背中に悪寒が走った。

「――鎮魂曲。レークヴァイエム」

言葉では言い表せない不安を隠すためにアプリルはヴィントの外套をギュツと握る。

「……で、そのSランクの鎮魂曲レークヴァイエムさんが俺に殺気を向けてまで何の用だ？」

「物怖じしない性格……うん、君なら僕たちの仲間に引けを取らないだろう。」

目の前にいるのは冒険者の中でも最高位の強さを持つ人間。

だが、ヴィントが今まで師に仰いできたのも他の追隨を許さなかった化け物シエロである。

「仲間？」

「そう……僕は大陸中に名を馳せるあの大吸血、満月喰らいモント・フィンスターニスのフアーターを討伐するために仲間を集めているんだ。」

「なっ!？」

エンゲルの口から出た内容には流石に驚くヴィント。

満月喰らいモント・フィンスターニスのフアーターと言えば数百年に渡って大陸中を席捲

し、その存在はもはや民話として語られている。

ヴェステン国では満月喰らい モント・フィンスターニス を題材にした絵本も出ているほどだ。

「依頼書にある危険度はSSS級……これは、Sランクの冒険者が三人以上集まらなければ依頼を受けることができない超難関依頼だから……どうか君の力を借りたい。——天災。」 カタストローフ

第二章：第三話：ギルド（後書き）

今更ですが、改稿前の面影がギリギリしか残ってない。

このりゅうかくを読んでも皆さんって、龍のアザをくも読んだ方ばっかしなんですかね？

それとも、このりゅうかくだけ？

なんか気になりますね（・。・；

ちなみに満を持してか判りませんが、次回かその次にはあの娘が出ます！

というか作者が出したい！

黒いアイツも出す予定です。

感想ありがとうございます。

引き続き、評価に感想、誤字脱字の報告をお待ちしております。

第二章：第四話：“ありがとう”（前書き）

誤字脱字と校正の報告ありがとうございました。

引き続き感想に評価、誤字脱字の報告をお待ちしております。

第二章の第四話目にきてようやく一日目が終わりました。

もう少し場面をスムーズに進めていきたいです……

そして、あの娘の登場は次回に先送りになりました。

期待していた方はすみません。

言い訳は後書きで（え

第二章：第四話：“ありがとう”

「依頼書にある危険度はSSS級……これは、Sランクの冒険者が三人以上集まらなければ依頼を受けることができない超難関依頼だ。だから……どうか君の力を借りたい。——天災。」
カタストローフェ

エンゲルの言葉に息を飲んだヴィントとアプリル。

「遠慮しとく。」

だが、ヴィントはその誘いには乗らなかった。

「……どうして、と聞いてもいいかな？」

良い返事が返ってくるとは思っていなかったのか、エンゲルは微笑みを崩さなかった。

「そんな伝説級の吸血鬼と戦いたくないからだ。大体満月喰らいモント・フィンスタールニスってここ数年は噂すら出てきてなく、その住処すら判ってないだろ。」

過去には各国の討伐隊を幾度となく退けた無類の強さを持つ満月喰らいモント・フィンスタールニスだ。

ヴィントでなくとも関わりたくないというのが心情だろう。

だが、七、八年前まではそれなりに噂を聞いていた満月喰らいモント・フィンスタールニスだが、ここ数年はその名前を聞くこともなくなり潜めていた。

「確かにね。でも、ここ最近噂を聞かないのはどうも死期が近く弱っているらしいよ。それに……ある情報筋によると旧聖王国の跡地に住処があるらしい。」

「ハッ、それこそ無理だろう。千年以上前の大陸歴以前に大陸から消えた旧聖王国の跡地をいまの今まで見つけたなんて話聞いたことないぞ。」

旧聖王国……過去に大陸全土を統治し、栄華を極めた国だが何かしらの理由で一晩の内に滅びたという。

その詳細はどの国の歴史書にも残っておらず、判っているのは現シエントウルム共和国の何処かに王都があったらしいということだけで、その全貌は現在でも謎に包まれている。

聖王国が滅びた後に各国が建国し、大陸歴が始まったということしか今のところ判っていない。

「そうだね……けど、実際に君の目で見ただけではないだろう？ ギルドが創設されてから数十年、大陸内の未開の土地や遺跡は加速的に発見されてきた。」

「……」

「まだ仲間になってもらえたわけじゃないから詳しくは話せないけど、どうやら満月喰らい^{モント・フィンスターニス}は旧聖王国時代に建てられたある古城を根城にしているみたいだよ。そして、その古城な周りを結界で隠し続けてたみたいだけど、弱ってきたからか、ひと月に一度その結界が緩まる時があるんだ。」

「なるほど。その時に発見したということか。」

「その通り。それでそのひと月に一度というのが――二日後。」

「二日後……ん？　――新月か？」

「ご明察。どうやら頭も回るみたいだね。これは是非とも仲間になつてもらいたいものだね。」

「断る。それにもう必要人数は集まってんだろ？　ならそいつらとやってくれ。俺は他にやることがあるんだ。」

話はそれでお終いと言わんばかりにヴィントはアプリルを連れてギルドを出て行った。

「……フラれちゃったか。残念。」

残されたエンゲルはその場でため息を吐いた。

「だから言ったじゃない。あんな奴要らないって。」

「念には念を、だよ。子守唄。^{ヴィーゲン・リート}」

気配もさせず、後ろから掛けられた声に振り返らずエンゲルは応える。

「その名前はギルド内で呼ばないでよ。二つ名の意味ないじゃない、^{レック・ヴィエム}鎮魂曲。」

その言葉にむっとした様子で言葉を返され、エンゲルは振り返っ

た。

「ごめんね、クラヴィーア。」

そこにはエンゲルの劣らないぐらい頭から靴まで全身真っ白の少女が紺碧の瞳で睨みつけていた。

その顔立ちは幼げながらも可愛らしく、美少女という言葉がよく似合い、睨み付けにも迫力はなかった。

「それから子ども扱いはやめなさい。これでもあんたより年は上なんだから。それよりもさっさとシュタルクと合流しましょう。こんなゴミ溜めみたいな所にうんざりだわ。」

クラヴィーアと呼ばれた少女は颯爽とした足取りでギルドの出口へと歩いていく。

エンゲルもため息を一度吐くとその後を追いかけた。

ボタン

扉が閉まり、誰かが呟いた。

「あれが大陸屈指の冒険者チーム、パラディースの二人……」

+

+

+

「あ、アイツのせいで宿屋の軒旋忘れた……」

「あ。そういえば……」

二人はギルドから数分歩いた所で思い出す。

「まア、こんだけでかい街だ。宿屋も何軒もあるだろうし、歩いてればその内見つかるだろう。」

「そうだね。」

ヴィントの読み通り、そこから少し歩いた所に一軒の宿屋を見つけた。

「いらっしやいませ。本日は二名様でのご利用ですか？」

「はい、二部屋で宿泊したいんですけど……」

「かしこまりました。少々お待ちください。」

受付の女性が手元にある宿泊名簿を調べ始めた。

「あれ、二部屋取るの？」

「ん？ そりゃリルもその方がいいだろ？」

アプリルの質問にヴィントも問い返す。

ヴィントとしては出会ったばかりの女の子が男と同じ部屋は嫌だ
ろうという配慮からだったが一――

「申し訳ありません、お客様。今夜の空き室が一部屋しかなくて……」

受付の人が申し訳なさそう言う。

「そうですか、他の宿屋をあたるか……」

「おそらく、この時分ですと他の宿屋も宿泊状況は同じかと……」

ヴィントの提案に受付の女性が他の宿屋の状況を教えてくる。

そこへ新たな客が宿屋に入ってきた。

「どこもかしこも満室かよー。」

そんな嘆きが聞こえてきてはヴィントは何も言えない。

もしここを諦めて他の宿屋をあたってても無駄に終わりそうだ。

「リル、悪いけど同じ部屋でもいいか？」

「仕方なさそうだしね……それに私は同じ部屋は嫌だなんて思って

ないよ。」

困った顔で訊ねる姿に苦笑で返したアプリルは上目使いでヴィントの顔を覗き込む。

「じゃ、じゃあその部屋でお願いします。」

その仕草にドキリとしたヴィントは捲し立てるように言った。

「はい、判りました。こちらが204号室の鍵になります。そちらの階段からお部屋へどうぞ。」

歩いて九二人を受付の女性（二十四歳独身）は微笑ましさ七に羨ましさ三といった眼差しで見送った。

部屋で一息ついた二人は夕食を食べに再び街に繰り出す。

雑談を交えながら食事処を探す二人は雰囲気によさそうな店を見つけ、そこで夕食を取ることに決めた。

美味しい料理に舌鼓を打った二人は大満足のお腹を携えて宿屋に戻る。

部屋に戻ると先ほどは意識の外に追いやった部屋のかんりの面積を占めるダブルサイズのベッドに否応なく目を取られた。

「……」

「……」

お互いに無言で部屋の入り口で立ち尽くす二人。

「と、とりあえずここでもしとててもしょうがないし、風呂でも入るか。」

「え、一緒に!?!」

ヴィントの提案に驚くアプリル。

「あ、阿呆! 順番にだよ!」

「そ、そうだよね! あはは……」

二人して真っ赤になってあたふたする姿は端から見たら滑稽だったが、この部屋にそれを指摘する人間はいない。

しばらくしてようやく落ち着いた二人はアプリル、ヴィントの順で風呂に入った。

ヴィントが風呂から出るとベッドの上で何やら四苦八苦しているアプリルが目に入った。

「うーん、上手くできないな……」

「どうしたんだ？」

髪の毛をタオルで拭きながらヴィントが訊ねる。

「寝る前に髪を三つ編みにしようと思ったんだけど、上手くできなくて……」

「ん？ いつもはどうしてたんだ？」

「お母さんに頼んだり妹がやってくれたりしてたんだけど……」

そういつて失敗した三つ編みを解いて髪を櫛で梳かしながら唸り声を上げるアプリル。

「それなら俺がやってやるよ。」

「あ……」

ヴィントはアプリルの手から櫛をパツと奪い取ると、丁寧に銀色の髪を梳かす。

「大丈夫？」

「ああ、三つ編みなら母さんによくやらされた。」

「お母さんのを？」

「そ。母さん、普段は幼いからやたら甘えてくるんだ。」

ヴィントは苦笑しながら髪を優しく梳く。

アプリルは慣れた手つきと苦笑交じりながらも優しげな声で言う
ヴァイントから、母親への愛を感じた。

「お母さんのこと大好きなんだね。」

「まア、な。俺を大切に育ててくれた人だ。殺されかけたことも数えきれないぐらいあるけど……」

「あはは！」

後半はうんざりといった声色で話すヴァイントだが、アプリルにはそれが照れ隠しなのが判った。

「よし、できた。」

「うん、ありがとう。」

髪を梳かしながら緊張も解けたのか、二人はベッドの淵に腰掛けながら昔のことについて話し始めた。

「あの時は怖くて痛かっただろ……本当にすまなかった。」

ヴァイントはベッドから立ち上がると、床に手について土下座をす

る。

「え、え？ ヴィオ？」

ヴィントは当時の出来事を話す。

「そして、今日リルと出会って背中の中の傷を見るまで、俺はあの時のことを忘れてたんだ。リルの心と背中に深い傷を負わせてたのに、俺は……自分の過ちから目を逸らして生きてきたんだ。」

「……」

「リルはその背中の中の傷と向き合って生きてきたのに……それに、本当なら会ってすぐにでも気付かなきゃいけなかったのに……」

アプリルは何も喋らず、ただヴィントの懺悔を聞いていた。

「……ヴィオ、顔を上げて。」

「……？」

今まで黙っていたアプリルの言葉にヴィントが顔を上げるとそこには――

ベチン！

「痛っ!？」

――でこピンがまさに放たれる寸前だった。

「もう、私はちゃんとあの時に言ったよ。赦すも何も初めから私は
怨んでないって。それから、あれは私がお母さんの言いつけを守ら
ないで森の奥まで入ったのもいけないんだから……それに、私もヴ
ィオが背中^{イマ}の傷のこと言うまで、あの時の男の子がヴィオって気付
かなかったしね。」

「けど……」

「それに、背中^{イマ}の傷はもう無いよ。ヴィオがあの際に約束してくれ
た通りに治してくれたよ。」

「確かにいつか必ず治しに来るとは言ったけど、俺は忘れてたんだ
ぞ……今日出会わなければその約束も——」

ベチン！

「——痛っ!？」

「だーかーらー、私が良いって言ってるでしょ。ちゃんと約束を思
い出して、それで治した現在^{イマ}があるんだから過去のことはもう忘れ
る！ そんな私の傷が治らなかった場合の話^{イマ}をされても誰が得をす
るの？ ヴィオ？ 私？ それとも他の誰か？」

「……そうだな、じゃあ最後に——」

「ん、何かな？」

ヴィントは憑き物が落ちたかのような穏やかな顔を見せ立ち上
がる。

アプリルは立ち上がったヴィントの顔を嬉しそうに見上げた。

「——またその笑顔を見せてくれて“ありがとう”。その笑顔のおかげで俺は俺をやっと赦せそうだ。」

ヴィントの穏やかな微笑みにアプリルは顔が熱くなったのを感じた。

それは昔、アプリルが人狼ヴォルフに襲われて気絶し、目を覚ました時、傍にいた少年が自分を安心させるために浮かべた微笑みと同じだったからだ。

そして、少女は同じ相手に二度目の恋をした。

「わ、私こそ、ヴィオにありがとう、だよ。」

「ん、どうして？」

「昔もそうだけど、私……本当はこの旅も不安でしうがなかったけど、ヴィオと一緒に旅をしてくれるって言ってくれたのすごく嬉しかった。私ひとりじゃこんな部屋に泊まることもできなかったし……だから、“ありがとう”だよ。」

ヴィントは泣きそうになった。

言葉を紡ぎながらその時のことを思い出したのか、目元から涙が零れそうになりながらも、浮かべた笑顔にヴィントは昔、助けてくれてありがとうと言った少女の顔と同じだったから……

過去イマと現在、時が流れても同じ笑みを浮かべた少女に、ヴィント

は忘れてもなお在り続けた咎の柵しがらみがなくなった気がした。

そして、その笑顔で――

その後、二人は他愛もない話に耽り、時計の針が夜の深まりを伝えるまで続けた。

どちらかの欠伸を合図に、二人はぎこちなくベッドに入った。

お互いにベッドの端に寝る二人。

「な、なんか……うう。」

アプリルはなにやら葛藤しているようだ。

「……おやすみ、リル。」

「うう、おやすみ……ヴィオ。」

「あ、そうだ。」

「ど、どうしたの？」

反対側に寝るヴィントの言葉にビクンと反応するアプリル。

「人狼の時、俺のこと初恋の男の子って言ってたけど、昔……俺がヴォルフ
ヒーローリルを助けたときに浮かべた笑顔に一目惚れしたんだからな。」

「……え？」

「俺の初恋の相手はリルなんだ。」

忘れてて何をもって思うかもしれないけど、とヴィントがボソツと言ったがアプリルの耳には入っていなかった。

「それ、ほんとう？」

アプリルは今までで一番、顔が熱くなっていくのを感じる。

「ああ、それでさっきの笑顔を見て、

——また、好きになった。」

バサッ

自分の問いにそれ以上の答えが返ってきて少女は思わず起き上がった。

「わ、私もヴィオのことが、好き！ ……かも。」

予想以上に大きな声と勢いに自分で驚き、恥ずかしくなったアプリルは余計なひと言を加える。

「かも？」

アプリルの挙動や今の様子を見てたヴィントはニヤツとしながら

訊ねる。

「うう、かもじゃないです……」

アプリルは居た堪れなくなってシーツを頭に被せた。

「そっか、初恋は実らないって言うけど実ったかな？」

ヴィントは頭の後ろで手を組みながら嬉しそうに訊ねる。

「でも、本当に？」

「ん、信じてくれないのか？」

「だって、なんか意地悪なんだもん、ヴィオ。」

シーツから目元だけ出し、少し不満気なアプリル。

「男子ってのは好きな女子には意地悪したくなるもんなんだ。」

「けど、ヴィオは王族で私はただの村娘だし……」

アプリルはなおもゴニョゴニョと喋り続ける。

すると、今まで微笑みを浮かべていたヴィントの雰囲気が変わったのをアプリルは感じた。

ヴィントは立ち上がり、ベッドを回ってアプリルの前に立つ。

「王族とか村娘とか関係なく、俺はリルが好きだ。俺とリルが相互

いの近くに居続けるためにたくさんの障害があるかもしれないけど、それを理由に俺は諦めたりしない。」

「ヴィ、オ……」

「まだ信じられないなら、“言葉”で安心するなら百でも千でも、万でも好きなだけ言ってやる。けどな、言い損は願いたい下げだ。……俺を選べよ、リル。絶対に倅せにしてやるから——」

ヴィントは強引にアプリルの顎を上げて唇を奪う。

一瞬、目を見開くアプリルだが、すぐにヴィントに身を任せた。

「——返事は？」

「うん……」

その晩、二人は抱きしめ合って寝る。

二人が過ごした期間は過去を含めて一日に満たない時間だったが、そんなことは関係ないと言わんばかりに抱きしめ合う。

時間が育む恋もあれば、一瞬で溢れる恋もあるのだろう。

ただ、二人は自分の初恋が実ったことに、好きな相手が目の前にいることの倅せを噛み締めて眠りについた。

第二章：第四話：“ありがとう”（後書き）

言い訳

いやー、ヴィントとアプリルがそこまで深い理由も無く（？）恋人同士になったのが気に食わなくなったのも改稿を始めた理由なのに、会った日にアプリルに手を出したことが理由です。（え

まだキスだけですが。

小説を書いていて毎回思うのですが、どうしてキャラって勝手に動き回るのでしょうね？

私だけか？

この調子でいくと龍のアザをくに追いつくのでしょうか……

9／27 00..16追加

ユーザーネームをキュルビスから小鳥遊奈鳥。に変更しました。

twitterはじめました。

ユーザー名はtakanashinatorです。

更新情報や執筆状況などをつぶやいていきたいと思っています。他にも小ネタや裏話などもつぶやきたいな、など考えています。

<http://twitter.com/takanashinator>

第二章：第五話：運命の邂逅

「ん、んん……」

窓から差す朝日にアプリルは身を振る。

「ん……ふぁ……」

寝ぼけ眼を擦ろうと手を目元に持ってこようとするが上手く動かせない。

仕方なく重い瞼を何とか持ち上げたアプリルの目に整った顔立ちが映り込む。

「!？」

——そうだった、昨日ヴィオと……

すぐさま昨晚の出来事を思い出したアプリルは顔が熱くるのを感じる。

思わず起き上がろうとするが、ヴィントの腕に抱きしめられていた。

——うう、どうしよ……ヴィオを起こす？　それとも無理やり……

アプリルは色々と考えるが、目の前のヴィントの寝顔を見て考えるのをやめた。

昨日は凛々しい顔を見せていた目の前のヴィントだが、スヤスヤと気持ち良さそうに眠るその顔は幼く見え、あの日アプリルを助けてくれた少年を彷彿とさせたからだ。

アプリルはヴィントの胸に抱かれながらその寝顔を眺める。

それから数分後、ヴィントが目を覚ましたところで無性に気恥ずかしくなって顔を赤くしたのは別の話。

二人は身支度を整え、エントリッヒ・シヤハテル無限の箱に保管されていたサンドイッチで朝食を済ませた。

食後の紅茶を飲んでいるヴィントにアプリルが訊ねる。

「これからどうするの？」

「ん、とりあえず街に出て俺の父親について調べようかな……それに、リルの母親の薬も探さなきゃいけないしな。」

「そうだね。」

「リルが探している薬ってどんなやつ？」

「えっと……メディカメントっていう薬だよ。」

「メディカメント、ね。それじゃ、もう少ししたら出かけるか。」

「うん。」

紅茶で一服した後、二人は宿をチェックアウトして街に繰り出した。

太陽が二人の真上を昇る頃。

ヴィントとアプリルが喫茶店のテーブルで伏せていた。

「そんなすぐに見つかるとは思っていなかったが……なんの手掛かりも無しか。」

「うう……コッチもメディカメントはこの街になさそうだよ。」

お互いに色んな人や商人に訊ねが、成果は芳しくなかったようだ。

かろうじてアプリルが所望するメディカメントがシェントウルム共和国の西側にあるアポーテケという街にあることだけは判った。

ヴィントにいたってはその尻尾すら掴めなかった。

「この後もお父さんのこと探す？」

「そうだな……でも、あらかた訊いて回ったしな……」

「うーん……あ、ギルドは？　確か大陸中に情報網があるって言うてたよね？」

アプリル頬でテーブルの感触を味わうのをやめて体を起こす。

「リル……」

「え、な、何？」

アプリルの提案にヴィントは神妙な顔をして起き上がった。

「お前頭いいなー。」

ヴィントは手を伸ばしてアプリルの頭を撫でる。

初めはいきなりのことに戸惑ったアプリルだが、その行為を受け入れて目を細める。

「えへへ……」

「そうと決まれば、昼食を食べたらギルドに行くか。」

「そうだね！」

「あ、アプリルはどうする？　あんまりギルドの雰囲気よくなかったけど……」

「うーん……でも、一人でいる方が不安だし、ヴィントと一緒に行くよ。」

「そうだな、その方がいいかもな。」

会話を終えたところで店員が注文を運んできたので、二人は昼食をとることにした。

その後、二人はギルドに足を運んだがめぼしい情報は得ることはできなかった。

まだ、日中だがこのまま次の街を目指しても野宿をしなければいけなかったので、二人は昨晩泊まった宿屋で再び部屋を取り、旅に必要な物を買揃えることにして一日を終えた。

+

+

+

翌朝。

朝食を取り終えた二人はベッドに大陸地図を広げて、次の目的地を決める。

「すぐにもアポーテケを目指してやりたいけど、少し遠回りをしてシェントウルム共和国の首都、ハオプトを目指そうと思うんだけど、それでもいいか？」

「うん。ヴィントに旅路のお金全部出してもらってるのに、そんな我儘は言わないよ。」

「……母親の病気を早く治してあげたいと思うのが我儘とは思わないけどな。」

「お母さんは確かに早く治してあげたいけど、ハオプトに行ってもそんなに遠回りじゃないし、それに今すぐ死んじゃうってわけじゃないし大丈夫だよ。」

アプリルは地図を覗き込みながら言う。

実際にハオプトを経由してもそこまで遠回りというほどでもないのが実情だ。

「ありがとうね。私のお母さんの心配をしてくれて。」

「……」

微笑むアプリルにヴィントは心を奪われた。

そして、思わずアプリルを抱きしめた。

「ヴィオ……?」

「何だか無性に愛おしくなって……少しだけこのままでもいいか?」

「ん、しょうがないな。でも、少しだけだよ？　そうじゃないと
出発が遅れちゃうよ……」

首筋に顔を埋めてくぐもった声に少しくすぐったそうにしたア
プリルは、言葉では仕方なさそうに言うが、内心嬉しそうにしながら
ヴィントの背中に手を回した。

少しの間、抱きしめ合った二人は名残惜しそうに離れ、旅路の支
度を整えて宿をチェックアウトした。

二人は一路、シェントウルム共和国の首都、ハオプトを目指して
アンファングの街を出発した。

休憩を挟みながら二人は道中を進めるが――

「しかし、どうしても魔物に出くわすかな……さっきので二桁
だぞ。」

「あはは……」

見晴らしの良い小さな丘で昼食を取りながらうんざりするヴィン
トの物言いに、アプリルは苦笑いしかできなかった。

――その道程はただひたすら魔物との戦いだった。

二人は知らなかったことだが、今ヴィントたちが通っている道はアンファングからハオプトまでの最短の道ではあるが、魔物の出没率が高く、余程腕に自信のある冒険者ぐらいいしか通らない道である。

普通は少し遠回りをするが安全な街道を通るのがベターだ。

しかし、ヴィント自身はギルドでSランクとなんら遜色のない資質を見せたのだ。

この程度の強行軍などヴィントにしてみれば、過去にシエロによって魔物の住処の中心へ投げ込まれた時に比べれば大したことではなかった。

実際に二人はその強行軍のお蔭で、ハオプトまでの道程を三分の一縮めた。

昼食を取り終えた二人は地図を見ながら現在地の確認をする。

「今この辺だから日没頃には……」

ヴィントは呟きながら距離の計算をする。

そして、指差した先は――

「湖の辺り？」

――シエントウム共和国最大の湖、ゼー湖だった。

「順調にこのまま行けばな。」

「そうすると野宿？」

「いや、ゼー湖はシェントウルム共和国でも有数の観光名所だし宿屋ぐらいはあると思う。」

アプリルの問いにヴィントは答える。

常に霧が立ち込めるこの湖には昔から竜が棲むと謂われている神秘的な場所として、足を運ぶものが後を絶えない。

——竜、か。俺の《王認紋》も竜だしなんだか親近感が湧くな。

「この湖を横断すればハオプトに行けるね。」

「いや、聞いた話だと船とかは無いらしい。」

アプリルの提案にヴィントは首を横に振る。

「え、どうして？」

「どうも霧が常に立ち込めている上に、昔から水難事故に遭う確率が相当高いらしい。なんか湖に棲む竜の怒りを買うからって今じゃ地元の人間は船も出さないそうだ。」

「え、湖に竜がいるの？」

「さあな。そういう謂われがあるって話だ。真偽は判らんが水難事故が多いってのは事実だしな。……さて、そろそろ出発しようか。」

地図を畳んでヴィントが立ち上がった。

「そうだね。」

アプリルも立ち上がり、二人はゼー湖を目指して歩き始めた。

西の空が暮れてきた頃、二人はゼー湖の畔にあるペンション、オルトに着いた。

なんとか部屋を借りることができた二人はベッドの上に倒れ込んだ。

「流石に疲れた……」

「そうだね……」

あの後も魔物に襲われ続けた二人は、ただでさえ一日中歩き通したのだから肉体も精神もくたくたになるのは当たり前だろう。

少し一休みした二人は、ペンションで夕食を取ることにした。

「お待たせしました。」

運ばれてきた食事に舌鼓を鳴らす二人。

「このムニエル美味しいですね。ここの湖で取れた魚ですか？」

ヴィントはお冷を注ぎにきたペンションの従業員に訊ねる。

「そうよ、今日オーナーが釣ってきたばかりの新鮮なね。」

「ここの湖には竜がいるって聞いたんですけど、怒ったりしないんですか？」

先ほどのヴィントが話したことを思い出したアプ Ril も訊ねる。

「そうね……湖上に出て釣りとかすると事故に遭いやすいけど、畔で釣りをするぐらいなら何も起きないわね……どうやら湖の主は湖に人間が入らなければ怒らないみたいよ。」

「そうなんですかー。」

アプ Ril は納得したかのように頷いた。

「でも、そういう話聞くと本当に湖に何かいるのかもしれないな……」

「本当だね。」

二人は湖について他愛もない話をしながら食事を続けた。

部屋に戻った二人はベッドに座り雑談をしていた。

「ねえ、湖見に行ってみない？ 湖に着いた時もペンションにすぐ来たからちゃんと見れなかったし……」

すると、ふと思いついたようでアプリルが湖へ行くことを提案した。

「いいけど、今日新月だから外は真っ暗だと思うぞ。」

「あ、そっか……」

ヴィントの指摘にアプリルは肩を落として残念そうにする。

「まア、すぐ外だし行くだけ行ってみるか。」

その姿を見たヴィントはアプリルの提案を受け入れることにした。

「それに、月が無いってことは星がよく見えそうだな。」

そう言っってヴィントは立ち上がった。

「うん！ 行こう！」

アプリルも笑顔で立ち上がり、部屋から飛び出す。

「わぷっ!？」

「きゃっ!？」

すぐ後にドサツという音とアプリルの短い悲鳴が聞こえた。

「どうした？」

ヴィントがドアから顔を出すとアプリルと転んでいる女の子がいた。

「だ、大丈夫？」

「う、うん。だいじょうぶなの。」

アプリルが心配そうに声を掛けると女の子は自力で立ち上がった。

「ごめんね、ぶつかっちゃって……痛くなかった？」

「うん。だいじょうぶだよ、おねーちゃん。」

アプリルがしゃがみ込んで女の子に訊ねると、女の子は笑顔で答える。

「よかった……」

改めて女の子を見ると、年の頃は三歳か四歳でふわっとした黒髪が背中まで伸ばした可愛い女の子だった。

そして、何よりもアプリルが目を奪われたのは、ヴィントと同じ紅色の瞳だった。

「私の名前はアプリル。あなたのお名前は？」

「えっとね、メーヒのなまえはメートヒェンっていうの。」

女の子……メートヒェンはそう言って可愛らしい笑顔を見せた。

第二章：第五話：運命の邂逅（後書き）

ようやくメートヒエンを出すことができました。

龍のアザをくとは大分違った展開での出会いですが……

かなり急いで書いたんで伏線やら今後の見通しが甘いかもしれない
今話ですが、次回は納得いくまで書きたいと思います。

前回の後書きでも書きましたが、

ユーザーネームをキュルビスから小鳥遊奈鳥。に変更しました。

twitterはじめました。

ユーザー名はtakanashinatorです。

更新情報や執筆状況などをつぶやいていきたいと思っています。他にも
小ネタや裏話などもつぶやきたいいな、など考えています。

<http://twitter.com/takanashinator>

感想に評価、誤字脱字の報告をお待ちしております。

第二章：第六話：Sクラスの實力（前書き）

誤字脱字校正の報告ありがとうございました。

引き続き感想に評価、誤字脱字の報告をお待ちしております。

第二章：第六話：Sクラスの実力

「私の名前はアプリル。あなたのお名前は？」

「えっとね、メーヒのなまえはメートヒエンっていうの。」

女の子……メートヒエンは可愛らしい笑顔を見せた。

「メートヒエンちゃんって言うの。」

「メーヒでいいの。」

アプリルが名前を呼ぶとメートヒエンは首をふるふると振って愛称を伝える。

「メーヒちゃんね。それじゃ私もリルって呼んでね。」

「わかったの、リルおねーちゃん。」

二人が微笑ましく自己紹介をしている後ろでヴァイントは険しい顔をしていた。

「あ、こっちのお兄ちゃんはヴァイオって言うの。」

アプリルが振り向いてヴァイントの紹介をする時には、険しい顔つきはなりを潜めていた。

「俺の名前はヴァイオ。ごめんな、リルがぶつかって。」

「ううん。だいじょうぶなの。」

「えっと……俺もメーヒって呼んでいいのかな？」

「うん、メーヒでいいの。ヴィオおにーちゃん。」

「それじゃ、メーヒもここに泊まってるのか？」

「ううん、ちがうの。ママがおしごとしているあいだいるだけなの。」

「ママ？」

「メーヒ！」

ヴィントが訊ね返そうとすると、先ほど料理を運んできた女性が廊下の角から小走りで駆け寄ってきた。

「もう、勝手にお部屋から出ちゃダメじゃない。」

「あ、ごめんなさいなの……」

「あの、この子がかしませんでしたか？」

メートヒエンを軽く叱った女性は心配そうに二人を伺った。

「い、いえ……むしろ私がメーヒちゃんにぶつかっちゃったんです。」

アプリルが慌ててことの成り行きを説明する。

「そうだったんですか……でも、今日は外に出ない方がいいですよ。」

「え、どうしてですか？」

話を聞いた女性のキツパリとした物言いにアプリルが思わず聞き返す。

「それは……」

アプリルの疑問に女性は言葉が詰まる。

「大丈夫ですよ。外と言ってもペンションの前ぐらいですから。」

「それなら……でも、あまり湖に近づいてはダメですよ。」

「判りました。それじゃ……行こうか、リル。」

「あ、うん。それでは失礼します。」

ヴィントとアプリルは親子に会釈してその場を離れた。

二人はペンションから出ると夜空を仰ぐ。

「わぁ……綺麗だね。」

「……………」

「ヴィオ？」

「ん、ああ……綺麗だな。」

「どうしたの？ 何か考え事？」

どこか上の空のまま夜空を見上げるヴィントを疑問に思ったアプリルが首を傾げて訊ねる。

「まア………」

「？」

どうにも歯切れの悪いヴィントにアプリルはさらに首を傾げた。

何となく星を見る気分でもなくなったアプリルは、何気なくゼー湖に視線を移す。

「あれ、ゼー湖っていつも霧じゃなかったっけ？」

アプリルの目の前には月明かりが無いので見えにくいが、来た時にはあった霧が無くなっていた。

「え？」

ヴィントもアプリルの言葉に視線をゼー湖に移した。

「結局、真っ暗で何も見えないね。」

目を凝らしてみるも星明りだけでは何も見えない。

——新月、普段は霧が立ち込める湖、それに……あの女の子。どうやらあいつの話は本当だったのか？

「確かめてみるか……ハッ！ ……ゾネ・グレンツェン太陽の輝き」

ヴィントは右手に魔力を溜めて湖の上空に打ち出し、魔術名を唱えた。

湖上にはヴィントの魔力が膨張してできた疑似太陽が浮かぶ。

光源を得たヴィントはゼー湖を見渡す。

「あれは……城、か？」

遠目で細部までは判らないが、確かに湖に浮かぶ小島の上に古ぼけた城が建っていた。

——確か……『モント・フィンスターニス満月喰らい』は旧聖王国時代に建てられたある古城を根城にしているみたいだよ。そして、その古城の周りを結界で隠し続けてたみたいだけど、弱ってきたからか、ひと月に一度その結界が緩まる時があるんだ。』って言ってたよな。……ってことは、アレが——

「——モント・フィンスターニス満月喰らいの根城か。」

「ご明察。まさか君もここに来ていたとは……」

ヴィントの呟きに応える声は真後ろ。

すぐさまアプリルを背中に隠すように動き、臨戦態勢に入るヴィント。

「鎮魂曲……」
レクヴィエム

「もうこれは君を仲間に入れろっていう神の啓示かな？　けど、その前に……その腰の剣に添えた手は下げてもらいたいかな。」

相変わらず微笑みを浮かべる青年、エンゲルがそこにはいた。

「野外の夜で気配を殺して後ろに立つ輩が言うセリフか？」

「うーん……気配を殺してたのは別に君を驚かせるためじゃないんだけどな……」

「やっぱりそんな奴要らないって。」

「!？」

突然、ペンションの上から聞こえた声にヴィントが視線を向けると、そこにはエンゲルと同じく真っ白な少女が屋根の上で不機嫌そうに足をブラブラさせながら座っていた。

その後ろにはこれまた全身真っ白の……大柄の男がいる。

だが、その風貌は不気味で顔の上半分——目元から頭の天辺まで包帯で包まれていた。

「気配察知を怠っている。臨戦態勢に入るのが遅い。ついでに頭も悪い。どうしてこんな奴欲しがるのよ？」

「……聞いてれば随分な言い草だな。前の二つについてはまだ判るが、最後の頭が悪いってのはどういう見だ？」

年端も行かない少女の明らかに呆れてますといった言葉にヴィントは語調を荒げる。

「それに、簡単に心を乱す。」

「っ!？」

「まア、あたしは優しいから教えてあげるけど……あんた自分でアレが満月喰らいモント・フインスターニスの根城って言ってたじゃない。なら、ここはすでに敵地だと思わないの？ そんな中を暢気に気配も隠さずにいられるあんたにあたしは驚くわ。」

「……」

少女の言葉にヴィントは何も言い返すことができない。

「そもそもあんな馬鹿みたいな魔術使うし、あれじゃ敵に自分が来たことを知らせたようなもんじゃない。……ほら、敵さんもうやらお怒りみたいよ?」

少女が気怠げに古城を見やると、そこから一条の光が走った。

ボンッ

その光はヴィントが出した疑似太陽の中心を打ち抜き、辺りの光源は再びか細い星明りだけになった。

「はあ……敵もこっちの存在に気付いちやったみたいだし、もう静かに行く必要もなくなったわね。——シュタルク。」

少女は首を後ろに倒して大柄の男の名前を呼ぶ。

名前を呼ばれた男——シュタルクから魔力が漲っていくのがヴィントには感じられた。

「ああ、……ケルバー・エンダン肉体獣化——モデル アドラー驚！」

バサッ

シュタルクが魔術を唱えると闇夜にも目立つ純白の翼が背中から生え、数枚の白き羽根が舞った。

「相変わらず綺麗ね。」

目の前に舞った羽根一枚を掴んだ少女は、それを羨望の眼差しで眺めながら呟く。

その後ろではシュタルクが見る見るうちに全長五メートル程の真っ白な大鷲に姿を変えた。

「……」

「……」

ヴィントとアプリルはその美しさに言葉も出ない。

「それじゃ、吸血鬼狩りに行こうかしらね。」

『お嬢の仰せのままに……』

バサッ

大鷲に化けたシュタルクは翼をはためかせて屋根から飛び立った。

そして、空中を一度旋回すると少女の前で翼を羽ばたかせて滞空する。

「よっと!」

少女は屋根からシュタルクの背中に危なげなく飛び乗った。

『さあ、こんな所で油を売ってないでさっさと行くぞ。エンゲル。』

背中に少女を乗せたシュタルクはそういうと、大きく宙返りをする。

「あ、コラ!」

背中では少女が何やら文句を言っているが……

「そういうことだから……では、またの機会に。天災。」
カタストローフェ

最後にいつもの微笑を浮かべたエンゲルは、地上すれすれに滑空

してきたシュタルクの脚に掴まり、そのまま湖へと飛んで行った。

「あれがSクラスの奴らの実力か……」

「なんかとにかくすごかったね……」

二人はただ啞然とするだけだった。

「あ、さっき表が騒がしかったけど……何かあったの？」

少し一人になりたいと言ったヴィントの申し出を受け、先に一人でペンションの戻ったアプリルにメートヒエンの母親が開口一番訊ねてきた。

「あ、実は――」

アプリルは先ほどの出来事を簡単に説明する。

「なっ……」

話をする内にどんどん顔を青くしていく女性を気にしながらも、アプリルは話し続けた。

ドサッ

最後に三人がゼー湖に飛んで行つたと話し終えると、女性は床に持っていた物を落として酷く狼狽していた。

「え、えーと……？」

いきなりの出来事にアプ Ril もどうしていいか判らず狼狽える。

「どうしたんだ、リル？」

「どうしたの、ママ？」

そこに外から戻ってきたヴィントとペンションの奥からやってきたメートヒエンが二人の様子を訊ねた。

ひとまずアプ Ril は女性からヴィントへ視線を向ける。

「あ、ヴィオにメーヒちゃん……それがね、メーヒちゃんのお母さんにゼー湖のお城にあの三人が飛んで行ったことを伝えたら……」

アプ Ril はそこで言葉を区切ると床に座り込む女性に目を向けた。

「なるほどね……」

その話を聞いたヴィントは納得がいったという表情で何故かメートヒエンを見る。

「ん？　メーヒちゃんがどうかしたの？」

ヴィントの視線の先を追うと、そこには首を傾げるメートヒエンがいた。

「メーヒなにかヘン？」

二人の視線を受けたメートヒエンは自分の体を見下ろしてパタパタと触る。

そんなやり取りを聞いていた女性がいきなり立ち上がってメートヒエンを抱きしめる。

「わぷっ!？」

「へ？」

突然の行動に驚くメートヒエンとアプリル。

そんなことはお構いなしにメートヒエンを——我が子を庇うように——抱きしめる女性。

「メーヒ、メーヒ……」

「えっと……これはどういうことなのかな？」

全く訳の判らないアプリルは思わずヴィントに訊ねた。

「そうだな……大体の全貌は見えてきたが……メーヒ。」

「な、なに？ ヴィオおにーちゃん？」

名前を呼ばれたメートヒエンが反応するが、母親もビクンと反応する。

「もしかしてお前のお父さんの名前って——」

「やめて！」

ヴィントの言葉を遮るように女性が叫ぶ。

その様子を見たヴィントは静かに告げた。

「——やっぱり、ファーターだったか……」

数百年に渡って大陸中を席捲し、大陸中に名を馳せる大吸血鬼^{モン}
^{ト：フィンスターニス}月喰らいの娘だと……

その言葉を聞いて力が抜ける母親の心情など露知らず、メートヒ
エンは笑顔で答える。

「そうなの。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6844v/>

竜脈隔世

2011年10月10日10時43分発行